

富山市埋蔵文化財調査報告 55

# 富山市内遺跡発掘調査概要VII

—宮条南遺跡 西金屋・西金屋窯跡—

2013

富山市教育委員会

# 富山市内遺跡発掘調査概要Ⅷ

—宮条南遺跡 西金屋・西金屋窯跡—

2013

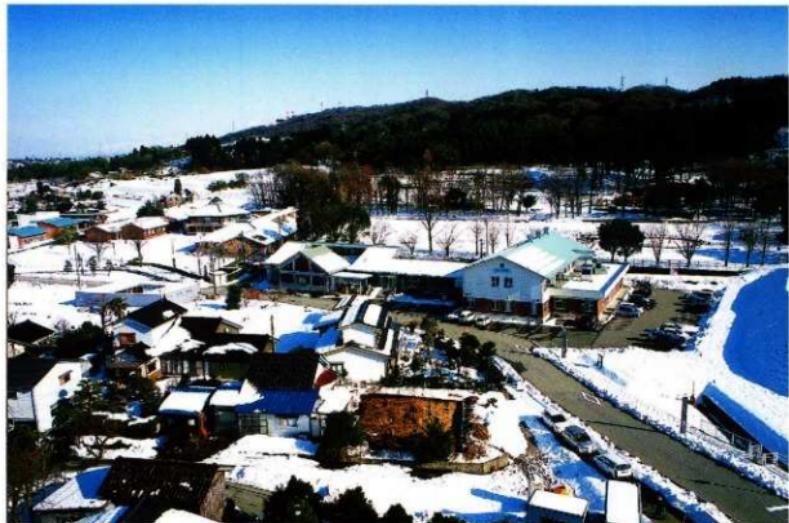
富山市教育委員会



宮条南遺跡 調査区遠景（西から）



宮条南遺跡 調査区近景（西から）



西金屋・西金屋窯跡 調査区遠景（西から）



土師器出土状況（南から）

## 例　　言

- 1 本書は、個人住宅建築に先立つ平成24年度富山市内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、富山市教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けて実施した。
- 3 本書で報告する調査遺跡の概要は次のとおりである。

### <宮条南遺跡>

遺跡所在地　富山市町袋地内  
発掘調査期間　平成24年10月9日～11月26日  
調査面積　202.4m<sup>2</sup>  
整理作業期間　平成24年11月27日～平成25年3月29日  
担当者　細辻嘉門（富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 主査学芸員）  
三上智丈 納屋内高史（以上同嘱託）

### <西金屋・西金屋窯跡>

遺跡所在地　富山市古沢地内  
発掘調査期間　平成24年11月21日～12月14日  
調査面積　136.18m<sup>2</sup>  
整理作業期間　平成24年12月17日～平成25年3月29日  
担当者　細辻嘉門（富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 主査学芸員）  
納屋内高史（同嘱託）

- 4 現地発掘調査及び資料整理に際し、下記の諸氏・諸機関のご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表します。（五十音順、敬称略）  
富山県教育委員会生涯学習・文化財室、富山県埋蔵文化財センター、古沢町内会、町袋町内会
- 5 出土遺物・原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。
- 6 本書の執筆・編集は細辻が行った。

## 凡　　例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系である。挿図の方位は真北、水平基準は海拔である。
- 2 文中、層序および遺物観察表で記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1995年版』に拠る。
- 3 遺構記号は、溝：SD、土坑：SK、ピット：SP、その他の遺構：SXを用いた。
- 4 図版中の網掛は、以下のとおりである。

地山 ■■■　須恵器・珠洲の断面 ■■■

## 目 次

I 宮条南遺跡 .....	1 ~ 28
第1章 調査の経過	
第1節 調査にいたる経過 .....	1
第2節 発掘作業及び整理等作業の経過 .....	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3 ~ 4
第3章 調査の方法と成果	
第1節 調査の方法 .....	7
第2節 層序 .....	7
第3節 遺構 .....	7 ~ 9
第4節 遺物 .....	22
第4章 自然科学分析 .....	24 ~ 25
第5章 総括 .....	26 ~ 28
<引用・参考文献> .....	28
II 西金屋・西金屋窯跡 .....	29 ~ 45
第1章 調査の経過	
第1節 調査にいたる経過 .....	29
第2節 発掘作業及び整理等作業の経過 .....	29
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境 .....	31
第2節 歴史的環境 .....	31 ~ 32
第3章 調査の方法と成果	
第1節 調査の方法 .....	35
第2節 層序 .....	35
第3節 遺構 .....	35 ~ 36
第4節 遺物 .....	43
第4章 総括 .....	45
<引用・参考文献> .....	45
報告書抄録 .....	46

みやじょうみなみ

# I 宮条南遺跡

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査にいたる経緯

宮条南遺跡は昭和63年度～平成3年度に富山市教育委員会（以下：富山市教委）が実施した分布調査で新たに確認され、遺跡地図に遺跡No201043として登載された。平成7～8年度にかけて、県営低コスト化水田農業大区画は場整備に先立つ試掘調査及び発掘調査が行われている。調査後、遺跡範囲の見直しが行われ、現在の埋蔵文化財包蔵面積は155,000m<sup>2</sup>である。

平成24年3月23日、富山市町袋地内において、個人住宅建設について埋蔵文化財包蔵地の所在確認依頼があった。建設予定地全域314.56m<sup>2</sup>が埋蔵文化財包蔵地（宮条南遺跡）に含まれていたため、同年4月20日に市教委で試掘調査を実施したところ、古代～中世の遺物包含層と土坑・溝・ピットを検出し、須恵器や中世土師器が出土した。建設予定地全域に埋蔵文化財の所在を確認したため、試掘調査の結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。協議の結果、住宅建築部分の地盤改良と據望設置工事の計画が避隔検査面よりも深く、埋蔵文化財を現地で保存することができないため、住宅建築部分と擁壁部分202.4m<sup>2</sup>について発掘調査を行い、記録保存することとなった。

文化財保護法93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、工事主体者から平成24年3月30日付けで富山市教委へ提出され、富山市教委の副中を付けて平成24年3月30日付け埋文第390号で富山県教育委員会へ提出した。

文化財保護法99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告は、富山市教委から平成24年11月1日付け23埋文第390号により富山県教育委員会へ提出した。

### 第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業は土木会社に掘削業務を委託し、埋蔵文化財センター職員が現地に常駐して調査の監理にあたった。調査着手前に、工事主体者とハウスメーカー立会いの下、調査が必要な範囲について確認を行った。

発掘調査は平成24年10月9日から同年11月26日まで行なった。表土掘削はバックホウを用いて平成24年10月9日から10月10日まで行った。排水は調査区外の敷地に横置きした、表上除去完了後の10月11日から人力による包含層掘削・遺構検出作業を開始した。試掘調査結果では遺物包含層が調査区全面に堆積することが想定されたが、掘削を開始すると、調査区西半分は遺物包含層がほとんど堆積せず、掘削作業は2日間で完了した。包含層の遺物は、任意に5mグリッドを設定してグリッド毎に取り上げた。包含層掘削が完了したところから遺構検出作業を行い、その後遺構掘削を行った。掘削作業と並行して随時写真撮影・測量・図面作成作業を行った。11月12日には遺構掘削を終え、高所作業車を使用して全景写真を撮影した。11月16日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。11月21日から現地埋め戻しを開始した。11月26日埋め戻し作業完了を確認し、現地調査を完了した。

遺物整理・報告書作成作業は、現地調査終了後埋蔵文化財センターで実施した。遺物接合作業は、遺構毎や5mグリッド内の他、グリッドと対応する遺構と包含層でも行った。遺構出土遺物でも口縁部が残るもの優先して図化した。遺物写真はデジタルカメラを使用し、図化したものを撮影した。また、遺構の年代を補強するため、炭化物の放射性炭素年代測定を自然科学分析会社に委託した。これらの作業と並行して原稿作成を行い、平成25年3月29日に本旨を刊行し、完了した。

I 宮条南遺跡

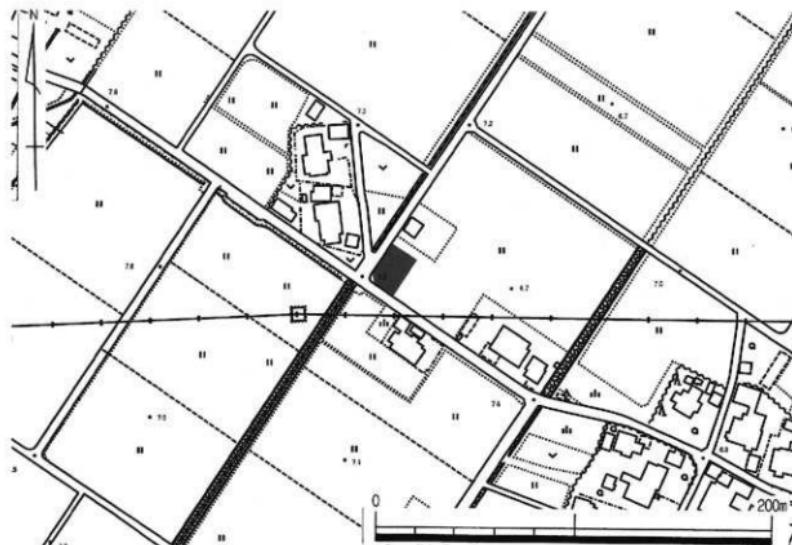


図1 調査区位置図 ( $S=1/2,500$ )

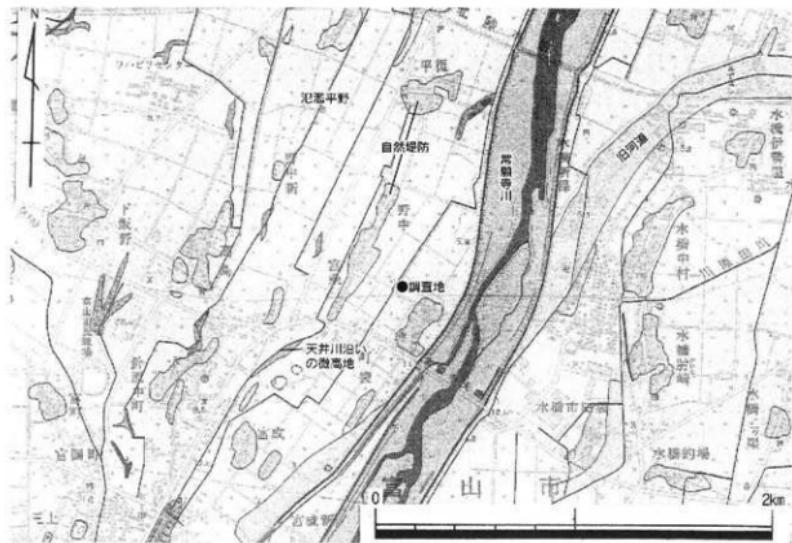


図2 遺跡周辺の地質 ( $S=1/25,000$ ) 國土地理院2007に加筆

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

富山市は富山県のほぼ中央部に位置する。富山市の地勢は、大まかに山間部と平野部に大別され、南が高く、北が低くなるという地勢を示しており、海岸から標高3,000m級の高山地帯までバラエティに富む。

富山平野は富山県中央部の大部分を占めており、北は富山湾と面し、東端は早月川扇状地、西端は県のほぼ中央を二分する貝羽丘陵に、南は飛騨山地から続く丘陵に接する。神通川・常願寺川とその支流が形成した扇状地や低位面・氾濫平野の発達が顕著である。

宮条南遺跡（図3-1）は、富山市街地から北東約8kmの富山市北部、富山市宮条・野中・町袋地内の東西300m、南北700mに広がる繩文・弥生・古墳・平安・中世・近世にわたる集落遺跡である。

今回調査区の所在する町袋地区は、富山湾から3km内陸に入った、常願寺川や神通川が織り返す洪水によって形成された自然堤防・微高地・氾濫平野上に立地する。現在の地形はほ場整備などにより平坦であるが、過去には常願寺川とその支流が幾度となく流れを変え、旧河道がいくつか確認される。集落の東側は常願寺川左岸と接する。常願寺川は上流に立山カルデラの膨大な崩壊堆積物を抱え、度々深刻な水害が発生し、日本有数の暴れ川として知られる。常願寺川の河口部分は、かつては町袋地区付近から北東に向きを変え、水橋駅の北方を東に流れ、白岩川と合流していた。明治24年の人洪水をきっかけとして、オランダ人技術ヨハネス・デレーケによって分水工事が行われ、現在のような北へ直流する姿となった。

町袋地区のほぼ中央を国道415号線が北西～南東に貫いている。地区の北方1.5kmにJR北陸本線が東西に走る。国道415号線の両側には家々が建ち並び集落の中心を形成している。地区周辺一帯は水田が大部分を占めており、米軍が1952年に撮影した航空写真（図版1）を見ても、現在の様相とほとんど変わりがない。土地利用は昔から微高地や自然堤防上に居住地、氾濫平野に耕作地という構成から変化が少ないと考えられる。

周辺の遺跡も、度重なる河川の氾濫を避けるように、微高地や自然堤防上に点在するという立地の傾向を示す。

今回の調査地は町袋地区の北端、遺跡の南東端に位置する。調査前の現況は水田である。調査区付近の標高は約6mで、ほぼ平地である。

### 第2節 歴史的環境（図3）

宮条南遺跡を中心として、神通川下流と常願寺川下流の遺跡について概観する。

本遺跡では、平成7～8年度にかけて、今回調査区の北方約400m、宮条地区の西側で県営低コスト化水田農業大区画は場整備事業に伴い用・排水路、道路部分について発掘調査が実施されている。調査では、中世の溝、ビット、近世の墓地跡を検出し、土師器・須恵器・土錐・珠洲・中世土師器・近世陶磁器などが出土した。〔富山市教委1996・1997〕

また、個人住宅に先立つ試掘調査で、繩文・弥生・奈良・平安時代の遺構、遺物を確認している。

周辺の遺跡に目をひろげると、旧石器時代から繩文時代中期の遺跡は、常願寺川上・中流の河岸段丘上を中心に分布し、本遺跡周辺では氾濫平野であり遺跡は散発的である。特に、繩文時代前期には海進がピークを迎えたこともあり、海岸線は現在よりもかなり内陸に入り込んで遺跡周辺は海の底になっていた。

この地域に人が住み始めたのは、現在のところ繩文時代後期初頭であると考えられる。本遺跡の北東2.5kmにある水橋荒町・辻ヶ堂遺跡（7）では、現在の海岸線からわずか200mのところで、工事立会中に繩文

## I 宮条南遺跡

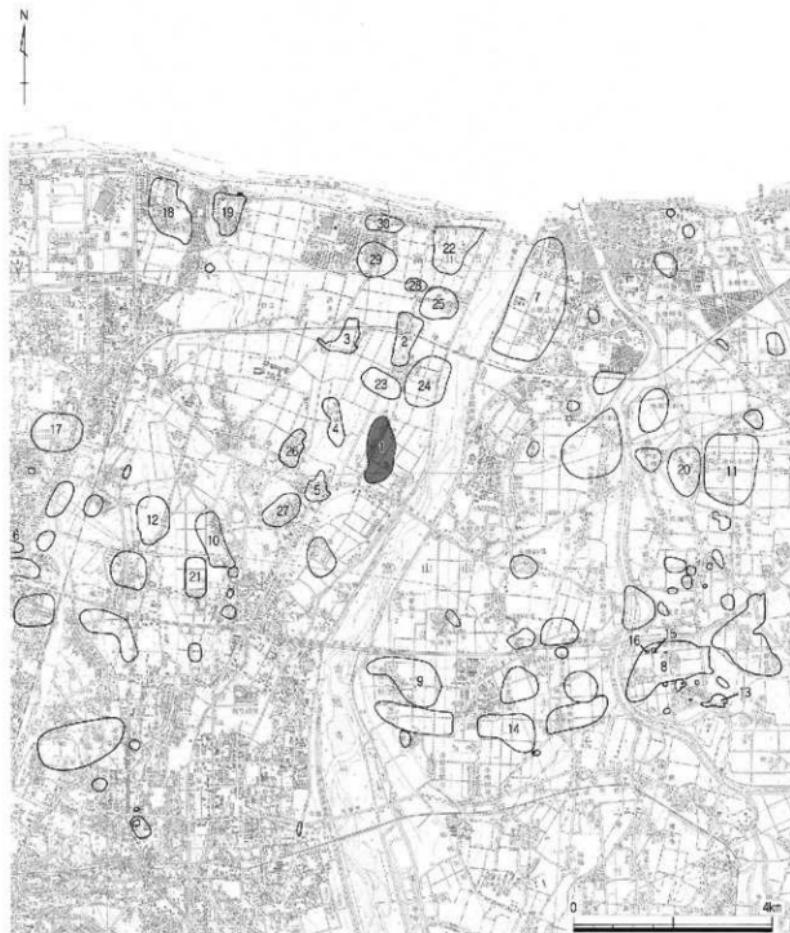
時代後期初頭の土器がコンテナに15箱出土している〔野垣2005〕。

繩文時代後期後半～弥生時代中期には、市内全体では遺跡が減少傾向であると相反して、この地域での遺跡数が増加する。浜黒崎野田・平根遺跡(2)では、は場整備に伴う発掘調査で、遺跡の北部から繩文時代後期後半～晚期前半の土器捨て場、遺跡の中火部～南部から弥生時代中期～古墳時代前期の集落、遺跡の中火部～東部から古代・中近世の集落を検出し、繩文土器・石器・土製品、弥生土器・土削器・須恵器・土錐・珠洲・中世土師器、近世陶磁器、木製品、鉄製品、銅鏡などが出土した〔富山市教委1996〕。出土した土製品の中でも、繩文後期の円盤状土製品は、繩文人の数字認識を証明する貴重な資料であるとされる〔藤田2008〕。このほか、浜黒崎悪地遺跡(3)、高島鳥浦遺跡(4)、針原中町1遺跡(5)〔富山市教委1994・1996・1998〕、豊田・豊田城遺跡〔藤田・橋本1974〕、豊田大塚・中吉原遺跡(6)〔富山市教委1998〕でも繩文時代晚期の造構、遺物が確認されている。常願寺川右岸地域では、水橋金広・中馬場遺跡(8)や水橋二杉遺跡(9)で、造構や遺物を確認した〔富山市教委1997〕。

続く弥生時代に入ると、前期の遺跡の分布は県内全域をみても低調である。中期に入ると、本遺跡の他に、針原中町1遺跡で、堅穴状造構を検出し、弥生土器壺などが出土した〔富山市教委1998〕。このほか本遺跡周辺では、浜黒崎悪地遺跡、浜黒崎野田・平根遺跡でも造構・遺物を確認している〔富山市教委1994・1996〕。神通川左岸地域では、本遺跡の南西2.0kmに所在する宮町遺跡(10)で、井戸を検出し、井戸の埋土から弥生土器壺が数個体出土した〔富山市教委2007〕。このほか豊田・豊田城遺跡、豊田大塚・中吉原遺跡でも造構・遺物を確認している。神通川右岸地域では、水橋小出遺跡(11)で側溝工事の際、弥生土器が出土している〔麻柄・志・麻柄幸子2005〕。弥生時代後期後半には遺跡数は増加し、古墳時代前期まで存続する遺跡が多い。飯野新屋遺跡(12)では、弥生時代終末～古墳時代初頭の井戸から一括廻収された十器が出土し、井戸祭祀とされている〔古川1984〕。清水堂南遺跡(13)では、玉作集落や円形周溝墓、方形周溝墓を確認した。新堀西遺跡(14)では環濠集落が確認されている〔富山県文化振興財團2008〕。古墳は常願寺川右岸に若王子塚古墳(15)や宮塚古墳(16)があり、この地域の開発を進めた首長の墓と考えられる。

奈良・平安時代に入ると、この地域では越中でも重要な遺跡が集中する。本遺跡の西方3kmにある米田大覚遺跡(17)では、8世紀末～10世紀初頭の掘立柱建物32棟を検出した。建物群は4群に分けられ、南の1群は5×4間の附付建物を中心に、10×2間の長舎建物がL字形に配置され、新川郡衙の郡庁域と推定されている〔富山市教委2006〕。平成23年度の調査では、婦負郡の郷名である「懸本」が新川郡衙であるこの遺跡で出土した。郡域を越えた交流があった証拠となりうる資料である〔富山市教委2012〕。豊田大塚・中吉原遺跡では、人面岩畫土器・斎串・人形などの祭祀遺物が多数出土し、米田大覚遺跡との位置関係から、新川郡衙の祭礼場と考えられている〔堀沢2003〕。常願寺川右岸では、水橋荒町・辻ヶ草遺跡で、奈良・平安時代の掘立柱建物50棟、井戸24基、区画溝、道路跡などを検出し、延喜式に記載された越中八駅の一つ「水橋駅」に比定されている〔富山市教委・富山市埋蔵文化財調査委員会1998〕。

中世～近世になると、本遺跡の北方海岸沿いに大村城(18)や日方江城(19)などの城館遺跡がある。小西北遺跡(21)では区画溝などの居館造構を確認した〔富山市教委2000〕。宮町遺跡や米田大覚遺跡でも、中世の道路跡や区画溝などを検出している。常願寺川右岸では、小山城跡(20)で、中世～近代に至る堀、溝、井戸、土坑などを検出し、陶磁器などのほか漆器が70点以上出土した。また鉛玉や体高がサラブレット程度の大型馬の骨など、戦に関係する遺物が出土し、文献資料に登場する小出城の位置を確定した〔富山市教委2007〕。このほか水橋金広・中馬場遺跡でも居館造構を確認し、鷲野城が水橋の場地内に比定される〔鹿島2004〕など、地域一帯が越中国の重要な地点となっていた。



1. 宮条南遺跡
2. 浜黒崎野田・平櫻遺跡
3. 浜黒崎恵地遺跡
4. 高島島浦遺跡
5. 針原中町Ⅰ遺跡
6. 豊田大塚・中吉原遺跡
7. 水橋荒町・辻ヶ堂遺跡
8. 水橋金広・中馬場遺跡
9. 水橋二杉遺跡
10. 宮町遺跡
11. 水橋小出遺跡
12. 飯野新屋遺跡
13. 清水堂南遺跡
14. 新堀西遺跡
15. 若王子塚古墳
16. 宮塚古墳
17. 米田大覚遺跡
18. 大村城跡
19. 日方江城跡
20. 小出城跡
21. 小西北遺跡
22. 高来遺跡
23. 猪中新長鶴遺跡
24. 平櫻鬼田遺跡
25. 横越遺跡
26. 高島遺跡
27. 針原中町Ⅱ遺跡
28. 浜黒崎野田Ⅱ遺跡
29. 浜黒崎飯田遺跡
30. 浜黒崎町畠遺跡

図3 周辺の遺跡分布図 (S=1/50,000)

I 宮条南遺跡



図版1 宮条南遺跡周辺の航空写真（1952年 米軍撮影）▲の交点が今回調査地

### 第3章 調査の方法と成果

#### 第1節 調査の方法

発掘調査は、最初に耕作土を試掘調査の結果をふまえながら遺構包含層直上までバックホウにより掘削・除去した。その後、遺構包含層から人力による掘削を行った。

当初、遺物包含層が調査区全面に存在する想定であったが、調査区西半分には包含層がほとんど残存していないかったため、ただちに遺構検出、遺構掘削を行った。調査区東側は遺物包含層が堆積するため、遺物包含層掘削後、遺構検出、遺構掘削を行った。遺構は断面観察用の畦を残して掘削し、ピットや小さな土坑は半截した後、断面を写真と図面に記録し、遺物が出土した遺構は、トータルステーションを使用して出土遺物の位置と高さを記録した後、完掘した。

図面は、平面図・断面図・遺物出土状況図とも縮尺20分の1を基本として作成した。

カメラは現地調査ではデジタルカメラ・プローニー（6×7）サイズを使用し、フィルムはカラーリバーサルと黑白を使用した。遺物写真は、デジタルカメラを使用した。

#### 第2節 層序（図4）

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。調査区の土層は、部分的に見られる耕作等による搅乱を除き、大まかに以下の5つの層に分けることができる。今回の調査ではV層の上面で遺構検出を行った。V層は調査区中央から東に向かって低くなる。遺物包含層に含まれる遺物は様々な時代のものがあるため、遺物が出土しない遺構は時代を特定できなかった。

I層：表土・耕作土

II層：2.5Y3/1黒褐色シルト+2.5Y5/2暗灰黄色砂質土（田床土）

III層：2.5Y3/2黒褐色シルト（旧表土・耕作土）

IV層：10YR2/2黒褐色粘質土（遺構埋土・遺物包含層）

V層：10YR4/4褐色シルト鉄分混（地山）

#### 第3節 遺構（図4～10、表1、図版2～6）

検出した遺構は、奈良～平安時代の溝・土坑・ピット、中世の溝・不明遺構などである。主な遺構の概要是以下のとおりである。

##### 1 波板状凹凸面を伴う溝

SD05 調査区中央を北西から南東へ向かって流れる。方向はN-40°-Wである。検出手長14.7m、最大幅1.5m、深さ0.45mで、平面形は緩い曲線状で西端から東に向かって広がり不明瞭となる。断面は舟底形を呈する。遺構東側には底部に長軸0.6～0.8m程度の土坑が近接して並ぶ波板状凹凸面の状態を呈する。SD08、SX10と新旧関係が見られる。遺構埋土は3層に分かれる。縦り不良である。遺構が構築されて間もなく一度埋まり、遺構廃絶の際一気に堆積したと考えられる。出土遺物は須恵器・土師器がある。時期を特定できる遺物はなかった。放射性炭素年代測定では、 $800 \pm 20$ yrBP年という結果が出ており、奈良～平安時代に埋設すると考えられる。

SD08 調査区南寄りを北西から南東へ伸び、途中で屈曲し西から東へ伸びる。方向はN-85°-Eである。検出手長14.75m、最大幅0.8m、深さ0.3mで、平面形は直線を呈する。断面は舟底形を呈する。遺構東側は底部に長軸1.0m程度の土坑が近接して並ぶ波板状凹凸面の状態を呈する。SD05、SX10と新旧関係が見られる。遺構埋土は2層に分かれる。縦り不良である。遺構が構築されて一度崩れ、削りなおされて遺構廃絶の際一気に堆積したと考えられる。出土遺物は土師器がある。時期を特定できる遺物はなかった。

## I 宮条南遺跡

SD19 調査区中央を北から南へ流れる。方向はN-4°-Wである。検出長7.8m、幅1.15m、深さ0.3mで、平面形は直線を呈し、調査区北端で途切れる。断面は不整形を呈する。遺構底部に長軸0.4~0.6m程度の土坑が0.3m間隔で規則正しく並ぶ波板状凹凸面である。SD16、SD18、SD22、SX10と新旧関係が見られる。遺構埋土は3層に分かれ、縊り不良である。遺構が構築されて間もなく一度埋まり、遺構廃絶の際一気に堆積したと考えられる。調査区北寄りで消滅する。出土遺物は土師器がある。時期を特定できる遺物はなかった。

放射性炭素年代測定では、 $1,170 \pm 20$ yrBP年という結果が出ており、平安時代に帰属すると考えられる。SD22 調査区中央を北東から南西へ流れる。方向はN-12°-Eである。検出長4.1m、幅0.6m、深さ0.16mで、平面形は緩い曲線状を呈し調査区外で途切れる。断面は舟底形を呈する。遺構南側に底部には長軸0.5~0.7m程度の土坑が0.3m間隔で並び、波板状凹凸面の状態を呈する。SD19、SX10と新旧関係が見られる。遺構埋土は2層に分かれ、縊り不良である。遺構が構築されて間もなく一度埋まり、遺構廃絶の際一気に堆積したと考えられる。出土遺物は土師器がある。時期を特定できる遺物はなかった。

SD35 調査区中央を北西から南東へ流れる。方向はN-60°-Wである。検出長5.9m、幅1.4m、深さ0.15mで、平面形は緩い曲線状で不整形を呈し、調査区内で途切れる。断面は不整形を呈する。遺構底部に長軸0.6~0.8m程度の土坑が0.3~0.4m間隔で並ぶ波板状凹凸面である。SX10と新旧関係が見られる。遺構埋土は2層に分かれ、縊り不良である。遺構が構築されて間もなく一度埋まり、遺構廃絶の際一気に堆積したと考えられる。出土遺物は土師器がある。時期を特定できる遺物はなかった。

### 2 その他の遺構

SD15 調査区中央を北西から南東へ流れる。検出長1.95m、幅0.4m、深さ0.1mで、平面形は直線を呈する。断面はU字形を呈する。SD35と新旧関係が見られる。遺構埋土は単層である。遺構廃絶の際一気に堆積したと考えられる。遺物の出土する高さは一定しない。出土遺物は珠洲の甕窓部があるが、時期を特定できる遺物はなかった。

SD16 調査区中央を北から南へ流れる。検出長1.95m、幅0.45m、深さ0.25mで、平面形は直線を呈する。断面は舟底形を呈する。遺構東側は底部に長軸0.6~0.8m程度の土坑が近接して並ぶ。

SK28 調査区南東で検出した。調査区外に広がるため全容は不明であるが、検出長3.1m、幅1.5m、深さ0.4mで、平面形は不整形を呈する。断面はU字形を呈する。遺構底部中央に北西から南西に伸びる溝状の部分がある。遺構埋土は単層である。遺構廃絶の際一気に堆積したと考えられる。出土遺物は須恵器がある。8世紀後半~9世紀代に帰属する。

SK31 調査区東端で検出した。SD35の延長にあたると考えられる。調査区東に広がるため全容は不明であるが、東西長0.4m、南北幅0.6m、深さ0.1mで、平面形は梢円形を呈する。断面は舟底形を呈する。遺構埋土は単層である。遺構廃絶の際一気に堆積したと考えられる。柱痕跡や工具痕、焼上、被熱部分などは見られなかった。出土遺物は土師器がある。時期を特定できる遺物はなかった。

SD42 調査区南東端で検出した。検出長1.25m、幅0.6m、深さ0.4mで、平面形は直線を呈する。断面は不整形を呈する。遺構埋土は3層に分かれ縊り不良である。断面観察から、遺構は何度も掘りなおされていると考えられる。出土遺物には土師器がある。時期の特定できる遺物はなかった。

SK47 調査区中央東寄りで検出した。SD05の遺構底部にあたる。検出長2.35m、幅0.7m、深さ0.03mで、平面形は不整形を呈する。断面は緩いU字形を呈する。遺構埋土は単層で、縊り不良である。遺構廃絶の際一気に堆積したと考えられる。柱痕跡や工具痕、焼土、被熱部分などは見られなかった。出土遺物

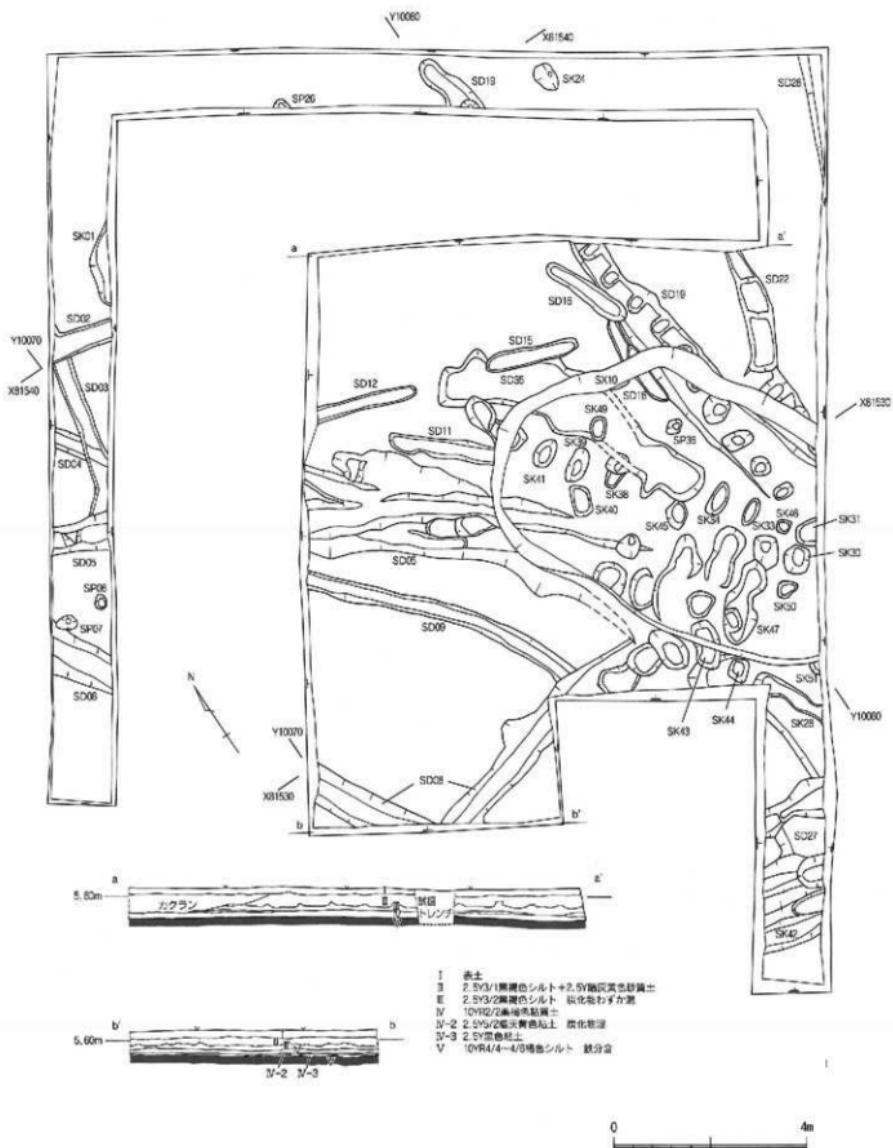


図4 調査区全体図・基本層序図 (S=1/100)

## I 宮条南遺跡

は土師器がある。時期の特定できる遺物はなかった。

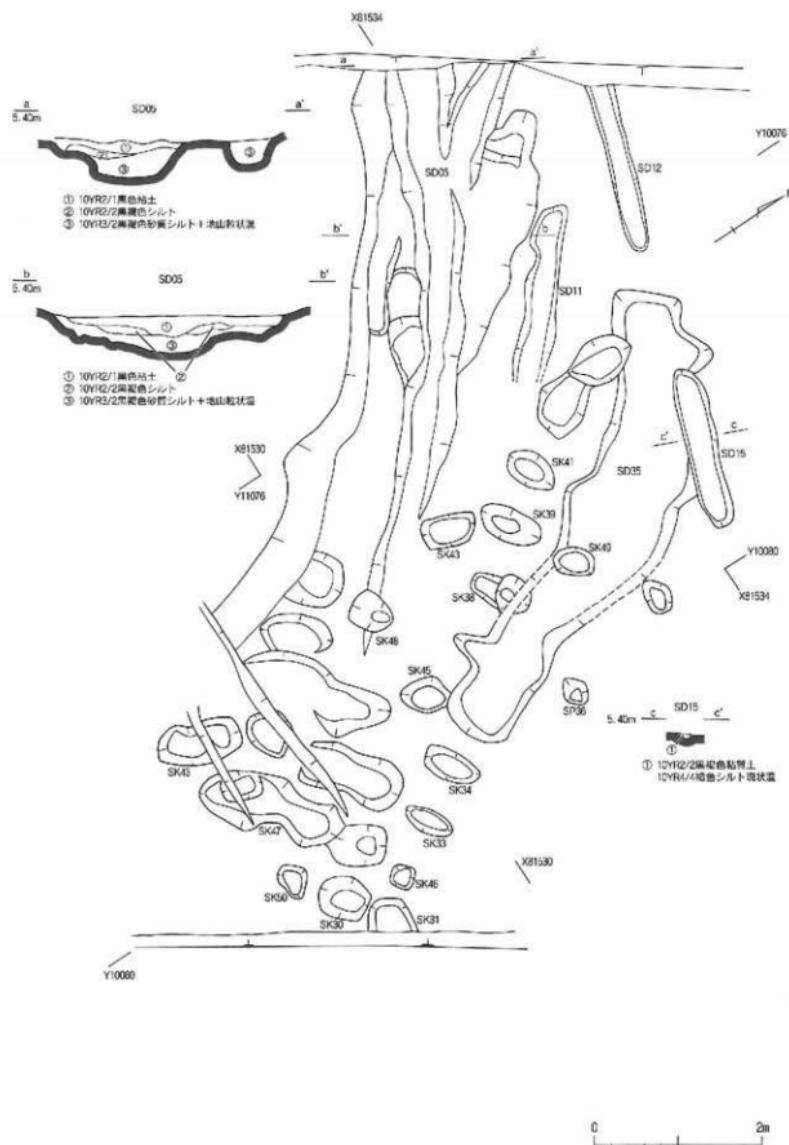
SK48 調査区中央東寄りで検出した。SD05の遺構底部にあたる。長軸0.55m、短軸0.35m、深さ0.1mで、平面形は楕円形を呈する。断面はU字形である。遺構埋土は単層で、縫り不良である。遺構廃絶後一気に堆積したと考えられる。柱痕跡や工具痕、焼上、被熱部分などは見られなかった。出土遺物には須恵器・土師器がある。時期の特定できる遺物はなかった。

SX01 調査区中央から南東に向かって広がる埴地のような遺構である。調査区東外に広がるため全容は不明であるが、検出長7.3m、検出幅5.4m、深さ0.2mで、平面形は楕円形を呈する。断面は緩い舟底形である。遺構埋土は単層で、縫り不良である。遺構廃絶後一気に堆積したと考えられる。埋土は2.5Y2/1黒色粘土と2.5Y6/1黄灰色粘土が斑状に混じり、炭化物・有機物を含む。当初足跡が残った水田遺構の可能性も考慮したが、斑状の痕跡の方向や大きさに法則性がないことから、水田遺構ではないと判断した。柱痕跡等は確認できない。出土遺物は須恵器・土師器がある。時期の特定できる遺物はなかった。放射性炭素年代測定では、1,190±20yrBP年という結果が出ており、平安～鎌倉時代に帰属すると考えられる。

遺構番号	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	断面形態	出土遺物	備考
SK01	楕円形	1.8	0.4	0.1	舟底形		
SD02	直線	1.3	0.5	0.1	不整形		
SD03	直線	3.3	0.4	0.1	U字形		
SD04	直線	1.1	0.4	0.12	U字形		
SD05	不整形	14.7	1.5	0.45	舟底形	須恵器・土師器	波板状凹凸面
SP06	円形	0.3	0.25	0.18	U字形		
SP07	楕円形	0.45	0.3	0.2	U字形		
SD08	直線	14.75	0.8	0.3	舟底形	土師器	波板状凹凸面
SD09	曲線	5.8	0.45	0.16	U字形		
SX10	椭円形	7.3	5.4	0.2	舟底形	須恵器・土師器	
SD11	直線	2.2	0.4	0.05	台形		
SD12	直線	2.1	0.3	0.05	台形		
SD15	直線	1.95	0.4	0.1	U字形	珠洲	
SD16	直線	1.95	0.45	0.25	舟底形	土師器	
SD18	直線	1.4	0.35	0.1	台形		
SD19	直線	7.8	1.15	0.3	不整形	土師器	波板状凹凸面
SD22	直線	4.1	0.6	0.16	舟底形	土師器	波板状凹凸面
SK24	椭円形	0.6	0.45	0.18	台形		
SP26	円形	0.35	0.2	0.2	台形		
SD27	不整形	1.3	1.8	0.3	不整形		
SK28	不整形	3.1	1.5	0.4	U字形	須恵器	
SD29	直線	2.15	0.45	0.13	U字形		
SK30	楕円形	0.6	0.5	0.05	舟底形		
SK31	楕円形	0.4	0.6	0.1	舟底形	須恵器	
SK33	楕円形	0.6	0.25	0.05	U字形		
SK34	椭円形	0.75	0.35	0.12	舟底形		
SD35	不整形	5.9	1.4	0.15	不整形	土師器	波板状凹凸面
SP36	椭円形	0.35	0.3	0.08	不整形		
SK38	椭円形	0.75	0.45	0.1	不整形		
SK39	椭円形	0.8	0.4	0.05	U字形		
SK40	椭円形	0.65	0.4	0.13	U字形		
SK41	椭円形	0.65	0.4	0.05	舟底形		
SD42	直線	1.25	0.6	0.4	不整形	土師器	
SK43	椭円形	1.05	0.5	0.1	U字形		
SK44	椭円形	0.5	0.4	0.25	U字形		
SK45	椭円形	0.6	0.4	0.08	不整形		
SK46	椭円形	0.3	0.25	0.03	台形		
SK47	不整形	2.35	0.7	0.03	U字形	土師器	
SK48	椭円形	0.55	0.35	0.1	U字形	須恵器・土師器	
SK50	椭円形	0.45	0.35		U字形		
SK51	椭円形	0.4	0.2	0.09	台形		

表1 遺構一覧表

# I 宮条南遺跡



I 宮条南遺跡

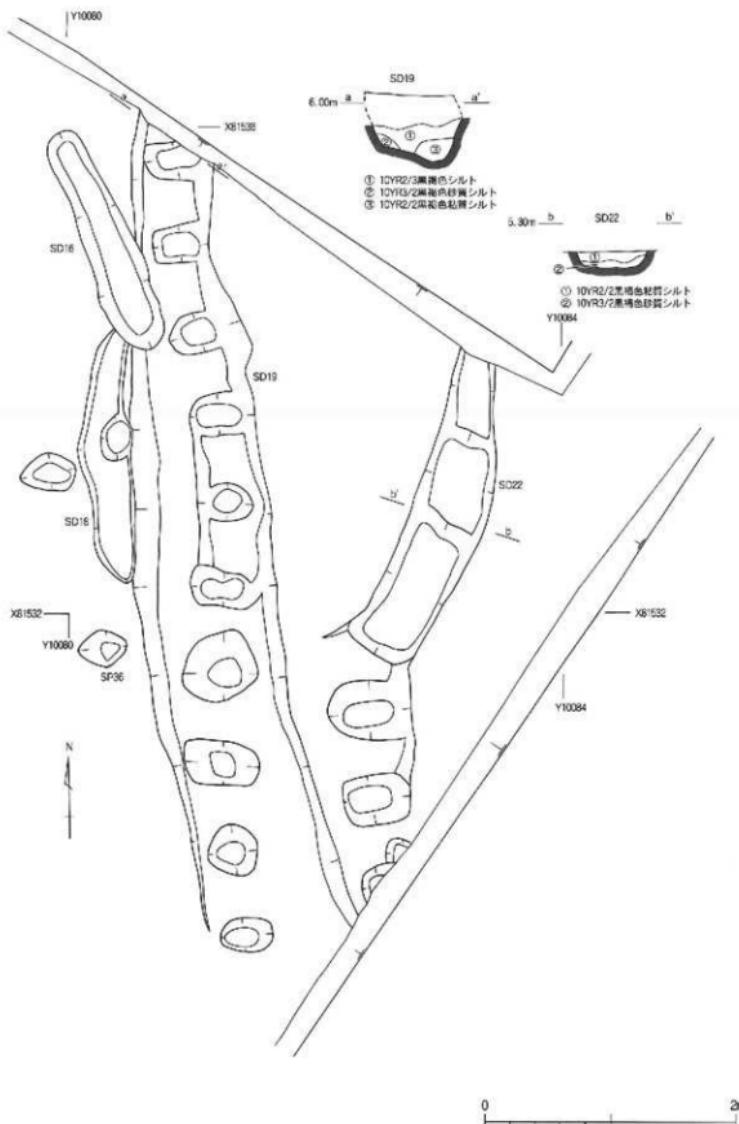


図6 遺構平面図・断面図(2) (S=1/40)

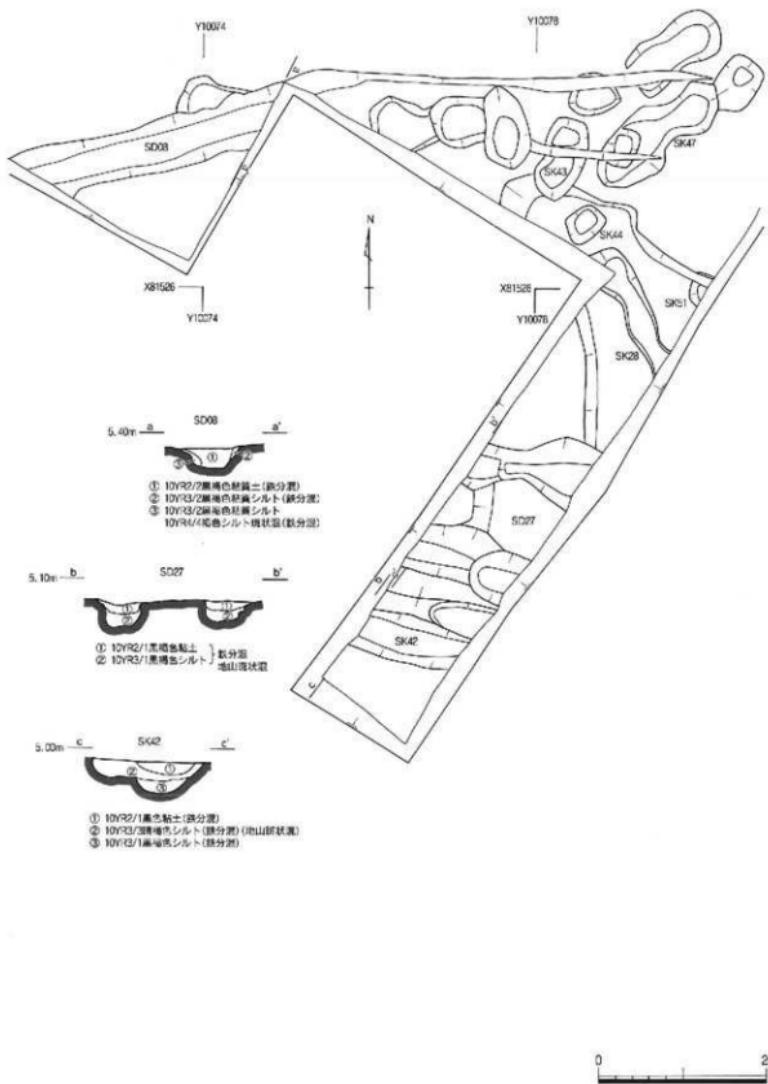


図7 遺構平面図・断面図(3) (S=1/60)

I 宮条南遺跡

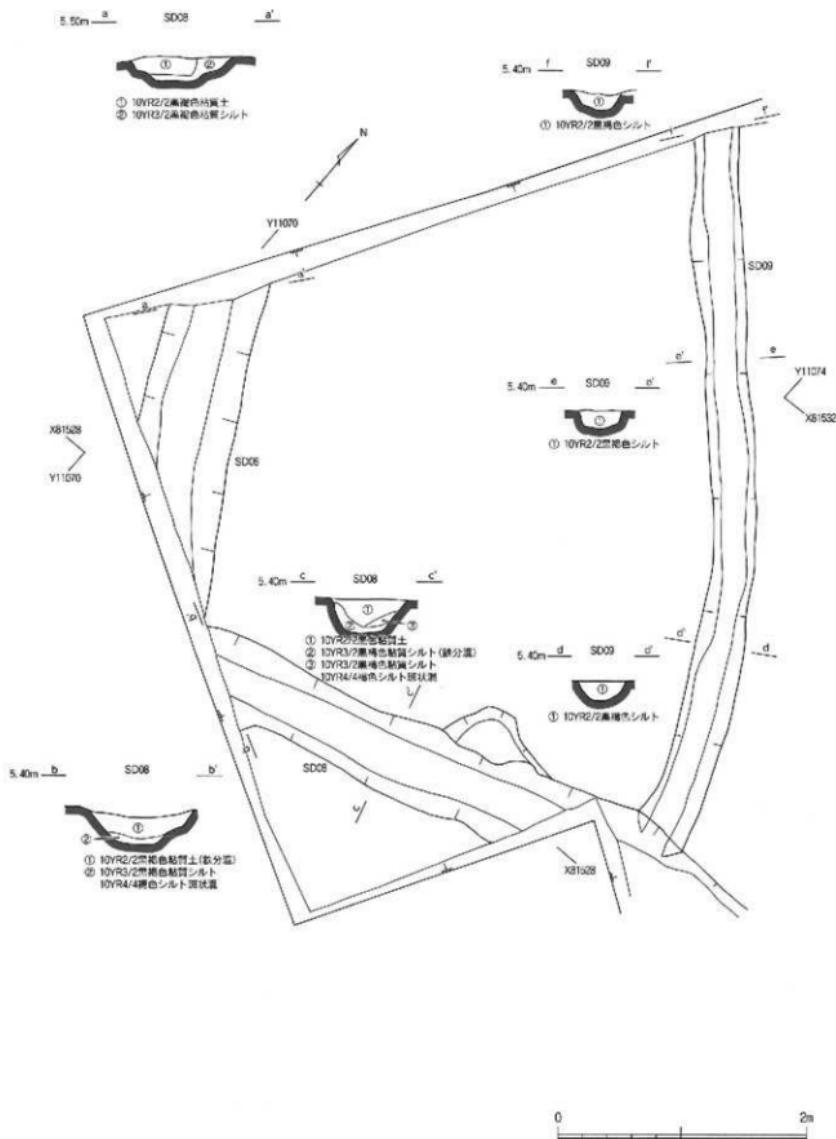


図8 遺構平面図・断面図(4) (S=1/40)

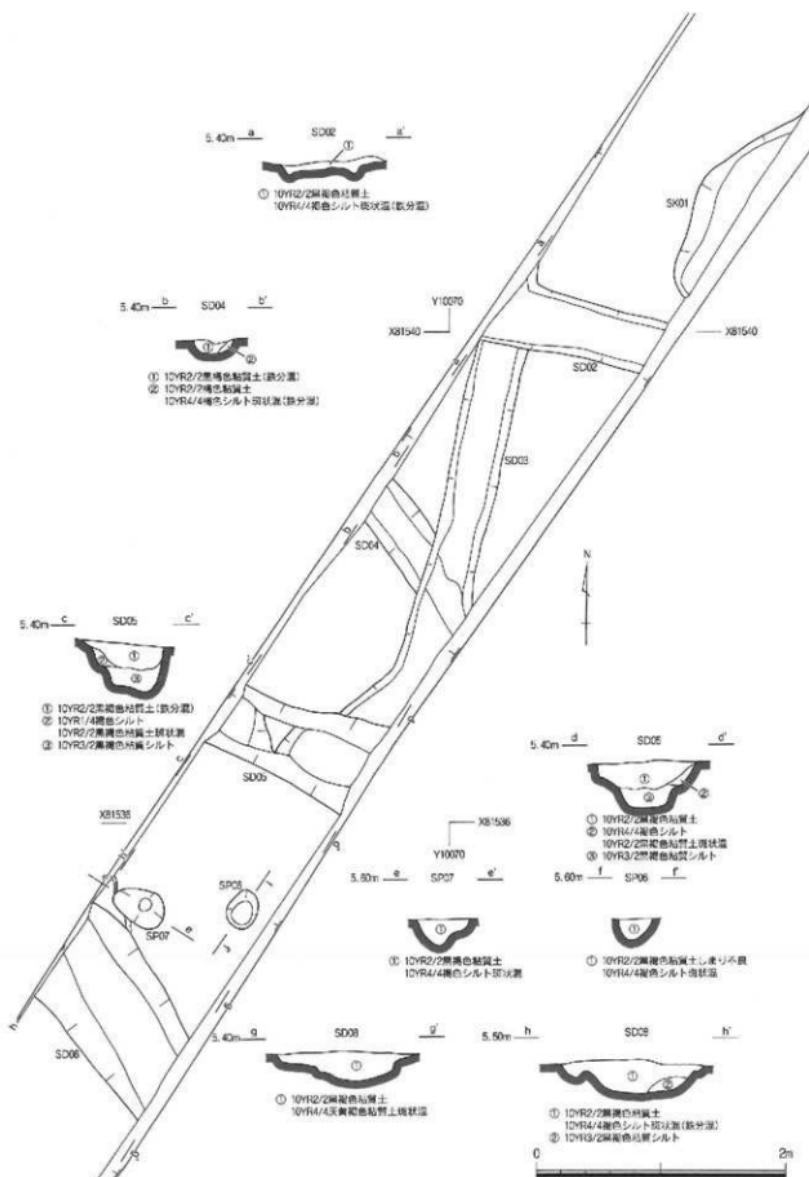
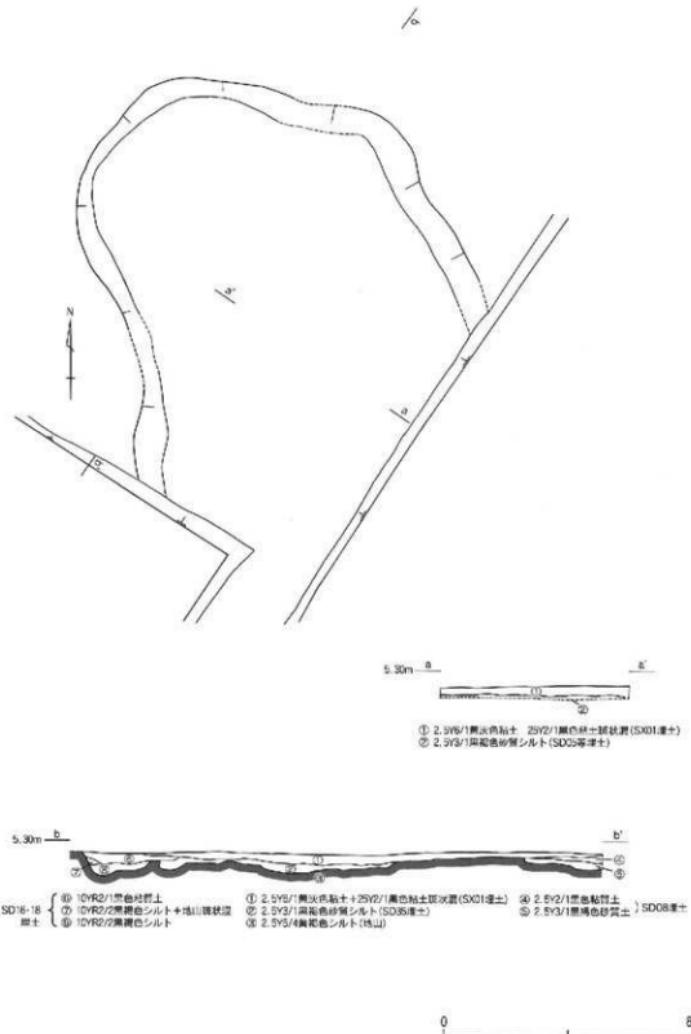
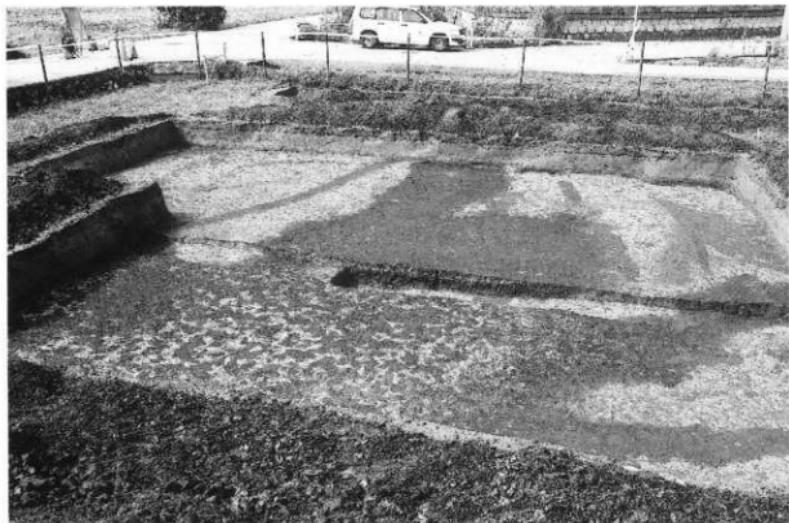


図9 遺構平面図・断面図(5) (S=1/40)

I 宮条南遺跡





調査区中央遺構検出状況（南東から）



調査区中央部遺構検出状況（北西から）

I 宮条南遺跡

圖版  
3 宮条南遺跡



SX10 完掘（東から）



SX10 完掘（北から）



調査区全景



調査区中央部完掘（南東から）

I 宮条南遺跡

図版  
5 宮条南遺跡



SD05 完掘（南東から）



SD05 完掘（北西から）



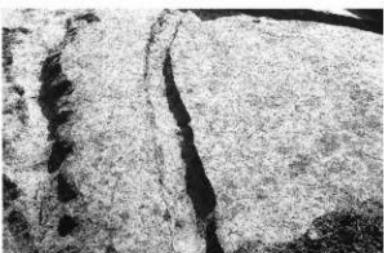
SD19 完掘（北から）



SD19 完掘（南西から）



SD08 完掘（北西から）



SD09 完掘（北西から）



SD08 西部分完掘（南東から）



SD03 完掘（北から）



SK44 完掘（東から）



SD27 完掘（西から）

# I 宮条南遺跡

## 第4節 遺物 (図11、表2、図版7)

### 1 遺構出土遺物 (図11 1~4)

1は須恵器壺Bである。底部と体部の境は角張り、体部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部はつまみあげたように細くなりながら外反する。貼付高台で内傾する。全体をロクロナデ、底部外面はヘラ切りである。ロクロの回転方向は不明である。胎土は精良、焼成良好である。調査区南東のSK28から出土。2は須恵器壺である。直線状に立ち上がる口縁部である。口縁端部は丸く収める。焼成はやや不良である。調査区中央のSD05から出土。3は須恵器鉢である。口縁を板状の道具で面取りし、端部が角を持つ。全体にロクロナデを施す。回転方向は不明である。焼成は良好である。胎土は精良で、鉄分のような黒色の粒子が見られる。調査区中央の四地SX10から出土。4は珠洲の甕剥部である。外面は叩き、内面には小石のような当て具の痕跡が残る。調査区中央のSD15から出土。

### 2 包含層その他出土遺物 (図11 5~14)

5~7は上師器である。5は甕か壺の頸部から胴部である。頸部で強く屈曲する。外面は頸部に縱方向のハケ、胴部はハケ後ナデである。内面は頸部に横方向のハケ、胴部は調整不明である。煤・炭化物は付着しない。6は壺の口縁部である。器形はまっすぐ延び、端部は丸く収める。調整不明、胎土は精良、焼成はやや良である。7は壺の底部である。器形は平坦で、外面に回転系切り痕がある。回転方向は不明である。胎土は密、焼成はやや不良である。8・9は須恵器である。8は平口縁部である。やや内傾し、口縁端部は丸く収める。胎土は精良、焼成良好である。9は壺B底部である。貼付高台で内傾する。胎土は精良、焼成はやや不良である。10・11は中世土師器・皿である。10は薄手で、外面とも調整不明、胎土は精良、焼成は不良である。11は厚手で、外面は口縁部ナデ、底部ヘラケズリ、内面はナデを施す。12は青磁碗である。外傾しながらまっすぐ延びる体部から、口縁部がやや外反する。端部は丸く収める。13は唐律系の壺である。内外面とも灰釉を施し、直立する削出高台である。14は越中瀬戸皿である。器形は直線的に伸びる。内外面に灰釉を施す。11と14は試掘トレンチから出土した。これら以外は包含層の山上である。

番号	出土地点	形 貌		胎 土		焼成	色 彩		底形・脚部		備 考
		断面	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)		質	砂粒	内 面	外 面	
1	SK28 須恵器・壺	14.8	5.7	10.0	精良	良	5Y5/1 灰		5Y5/1 灰	ロクロナデ 底部ケズリ	貼付高台
2	SD05 須恵器・壺	14.9	(2.0)	—	精良	良	2.5Y7/3 淡黄		2.5Y7/3 淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ
3	SX10 須恵器・鉢	25.2	(5.0)	—	精良	良	2.5Y6/2 灰黄		2.5Y6/2 灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ 黒色斑子
4	SD15 珠洲焼・甕	—	(5.0)	—	精良	良	5Y6/1 灰		5Y6/1 灰	当て具痕 (小円?)	タキ
5	包含層 土師器・甕	—	(4.5)	—	やや粗	良	HOYR6/2(灰黄褐色) HOYR6/1(灰白)		HOYR6/2(灰黄褐色) HOYR6/1(灰白)	ロコハケ	タクハケ・ハ ケナナデケン
6	包含層 土師器・甕(?)	8.8	(1.8)	—	精良	やや 良	7.5Y7/1 にぶい質		10Y8/2 灰黄褐	調整不明	調整不明
7	包含層 土師器・甕(?)	—	(1.1)	5.6	密	やや 不良	7.5Y8/4 にぶい質		7.5Y8/4 にぶい質	ロクロナデ?	ロクロナデ? 回転系切
8	包含層 須恵器・壺	19.4	(2.0)	—	密	良	5Y3/1 灰		5Y5/1 灰	ロクロナデ	ロクロナデ
9	包含層 須恵器・壺B	—	(2.0)	9.2	密	やや 不良	2.5Y6/2 灰黄		2.5Y7/4 淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ 内底へら切
10	包含層 中世土師器・皿	9.3	(1.6)	—	密	やや 不良	10YR8/3 淡黄褐		10YR8/3 淡黄褐	網目不規	調整不明
11	2F 中世土師器・皿	10.2	(2.1)	—	密	良	2.5Y8/1 灰白		2.5Y8/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラナデ?
12	包含層 青磁・甕	16.0	(2.4)	—	密	良	10Y6/2 オリーブ灰		10Y6/2 オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ 胎土10Y7/1灰 白
13	包含層 青磁?	—	(2.5)	5.2	密	良	10YR6/3 にぶい質		10YR6/3 にぶい質	ロクロナデ	青磁胎土、灰白 胎土2.5Y7/2灰白
14	青磁・レンガ	越中瀬戸	10.0	2.1	—	密	5Y6/4 オリーブ灰		5Y6/4 オリーブ灰	ロクロナデ	青磁胎土、灰白 胎土10Y7/1灰白

表2 出土遺物観察表

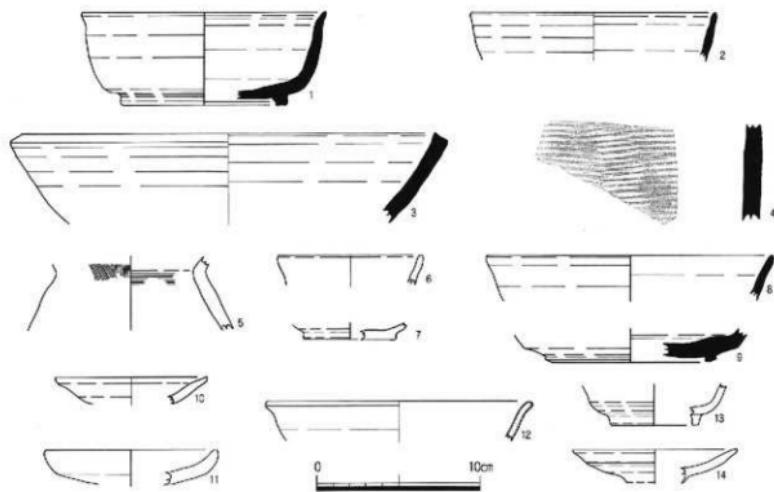
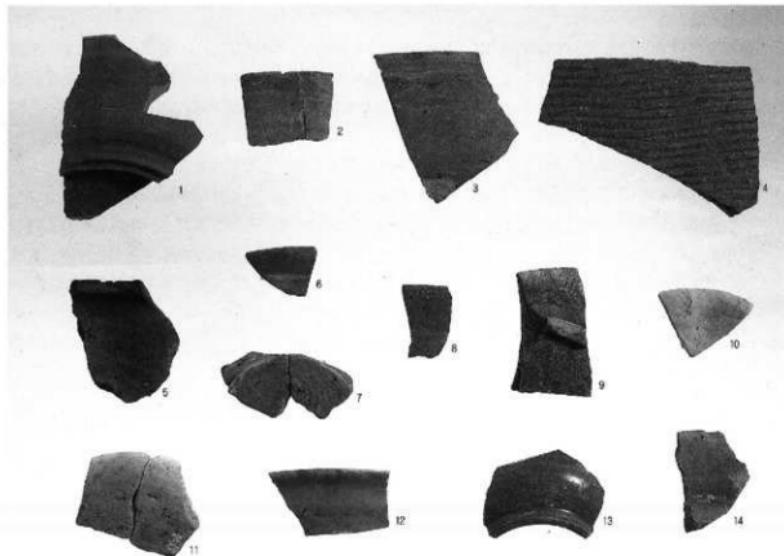


図11 出土遺物実測図 (S=1/3)



図版7 宮条南遺跡 出土遺物写真 (数字は実測図番号と一致する)

## 第4章 自然科学分析

(株) 加速器分析研究所

## 1 分析の目的

宮条南遺跡で検出した波板状凹凸面の埋土に含まれる炭化物をAMS法による放射性炭素年代測定を行い、遺物が出土せず時期決定の困難な遺構の時期判断を行う一助とする。

## 2 測定対象試料

宮条南遺跡の測定対象試料は、SXI0 ②層出土炭化物（No.1 : IAAA-122946）、SD05遺構埋土出土炭化物（No.2 : IAAA-122947）、SD19 ②層出土炭化物（No.3 : IAAA-122948）の合計3点である（表3）。

## 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常  $1\text{ mol/l}$  (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイルにはめ込み、測定装置に装着する。

## 4 測定方法

加速器をベースとした $^{14}\text{C}$ -AMS専用装置（NEC社製）を使用し、 $^{14}\text{C}$ の計数、 $^{13}\text{C}$ 濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$ 濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である（表3）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}\text{C}$ 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として選ぶ年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$ 年代は  $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい ( $^{14}\text{C}$ が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 ( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表4に示した。
- (4) 噴年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた校正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。噴年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する校正曲線上の噴年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは 2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が噴年較正年代を表す。噴年較正プログラムに入力さ

れる値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一行を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表4に示した。曆年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## 6 測定結果

炭化物の $^{14}\text{C}$ 年代は、SX10 ②層出土のNo. 1 が $1190 \pm 20$ yrBP、SD05 遺構埋土出土のNo. 2 が $800 \pm 20$ yrBP、SD19 ②層出土のNo. 3 が $1170 \pm 20$ yrBPである。曆年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、No. 1 が $783 \sim 880$ cal ADの間に2つの範囲、No. 2 が $1224 \sim 1258$ cal ADの範囲、No. 3 が $782 \sim 933$ cal ADの間に4つの範囲で示される。試料の炭素含有率はすべて約50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表3

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC (%)
IAAA-122946	No. 1	SX10 ②層	炭化物	AaA	-27.49 $\pm$ 0.32	1,190 $\pm$ 20	86.22 $\pm$ 0.23
IAAA-122947	No. 2	SD05 遺構埋土	炭化物	AAA	-23.59 $\pm$ 0.32	800 $\pm$ 20	90.56 $\pm$ 0.23
IAAA-122948	No. 3	SD19 ②層	炭化物	AAA	-26.35 $\pm$ 0.32	1,170 $\pm$ 20	86.47 $\pm$ 0.23

[#5556]

表4

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-122946	1,230 $\pm$ 20	85.78 $\pm$ 0.22	1,190 $\pm$ 21	783calAD-790calAD (6.2%) 810calAD-880calAD (62.0%)	776calAD-891calAD (95.4%)
IAAA-122947	770 $\pm$ 20	90.82 $\pm$ 0.23	796 $\pm$ 20	1221calAD-1258calAD (68.2%)	1215calAD-1270calAD (95.4%)
IAAA-122948	1,190 $\pm$ 20	86.23 $\pm$ 0.21	1,167 $\pm$ 20	782calAD-789calAD (4.8%) 811calAD-817calAD (25.2%) 856calAD-894calAD (35.3%) 928calAD-933calAD (2.9%)	777calAD-899calAD (84.1%) 920calAD-947calAD (11.3%)

[参考値]

## 文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360  
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150  
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19(3), 355-363

## 第5章 総括

### 第1節 遺跡の性格

宮条南遺跡は、從来縄文から近世までの複合遺跡であると周知されている。過去の調査では主に中世の遺構・遺物を確認しており、今回の調査では、奈良・平安時代・中世の遺構・遺物を確認した。

この地域は、奈良・平安時代には西に米田大覚遺跡（新川郡衙）、東は水橋荒町・辻ヶ堂遺跡（水橋駅）という官衙的施設に挟まれており、奈良・平安時代には地域一帯はおおむね開発されていたと考えられる。今回調査区は、西から東に向かって低くなっている、調査区西側は削平や搅乱を受け遺物包含層の堆積も見られず、遺構の残りも悪かった。調査区東側は包含層の堆積は厚く、奈良・平安時代の波板状凹凸面と考えられる遺構や溝、土坑などを検出した。建物遺構は検出しなかったため、今回調査区は、集落の縁辺部にあたると考えられる。

この地域一帯の当時の景観は、北西側の自然堤防上、現在の宮条地区に集落の中心があって、周辺に耕作地が広がり、東に常願寺川が北流していたと考えられる。

### 第2節 波板状凹凸面を伴う溝について

#### 1 遺構の概要

波板状凹凸面を伴う溝は、今回調査区の中央部から東端までのおよそ15m四方で5条検出した。調査区西側では確認できない。平面形は、同じ幅が続く溝（SD08・SD22・SD35）と、調査区東側の低い部分に向かうにしたがって幅が広くなる溝（SD05・SD19）がある。いずれも溝の底部に円形ないし梢円形のくぼみが並ぶ。くぼみの間隔は、くぼみが接するもの（SD05・SD08）と、0.3～0.4mの間隔で一定に並ぶもの（SD19・SD22・SD35）がある。検出時の観察では、歯の痕跡、硬化面は見られない。

凹凸面の検出手は、すべて溝の底部になる。凹部は深さ0.03～0.2mで、埋土は地山と同様のシルトである。締り不良で軟らかく、溝の埋土と変わりがなく分層はできない。凹部に硬化面や突き固めたりした痕跡は見られない。礫や砂利、砂などは全く混じらない。遺構の東端はすべて、調査区中央東端で集中する。あるいは西に向かって放射状に伸びる。遺構検出の際、近江に注意したところ、SD05とSD08ではSD05が古く、SD19とSD22ではSD19が古いと判断した。

放射性炭素年代測定では、SD05埋土から採集した炭化物が $800 \pm 20$ yrBP、SD19の埋土から採集した炭化物が $1,170 \pm 20$ yrBPという結果を得ており、おおむね平安時代に埋没したと考えられる。

#### 2 波板状凹凸面の定義からみた遺構の評価

波板状凹凸面という用語を初めて用いたのは、早川泉氏である。早川氏の定義によると、「道路遺構に直交する梢円形の圧痕」である。その後、近江俊秀氏による一連の論考がある。近江氏によれば、波板状凹凸面の定義は「道路遺構とともにあってしばしば検出される、円形ないし梢円形のくぼみが一定間隔で並ぶものをいう」（近江1995）となる。つまり、波板状凹凸面とは、遺ないし道路遺構に伴うことが前提である。しかし、近江氏は同じ論文のまとめで波板状凹凸面の性格について、1.『木馬道』のように枕木の痕跡と考えられるもの、2.道路の基礎であると考えられるもの、3.足掛け、4.自然発生的なもの、5.道路遺構に伴う遺構ではないもの、6.現状では性格が不明なもの、の六つに大別している。つまり、道路遺構に伴わない波板状凹凸面も存在すると考えている。

以上の定義に当てはめると、円形ないし梢円形のくぼみが一定の間隔で並ぶという特徴から、本遺跡の遺構は波板状凹凸面であると言える。

富山県内では、桜町遺跡（小矢部市）で7世紀後半、水橋二杉遺跡（富山市）で奈良時代後半、野下・新開遺跡（富山市）で奈良・平安時代、梅原落戸遺跡（南砺市）で14・15世紀、打出遺跡（富山市）で15世紀末までの波板状凹凸面が確認されており、同様遺構の類例は認められる。

### 3 「道・道路」の定義からみた遺構の矛盾

山村信榮氏の定義によると、道路遺構の認定について、必要条件として①帶状に連続性がある特定空間を形成すること、②基本的にその空間には、空間が使用された同時期の遺構が存在しないこと、十分条件として①路面と認定できる状況、舗装や硬化面を伴うこと、②切通し、土塁、橋梁や側溝などの関連施設を伴うこと、③轍などの通行を示す痕跡を伴うこと、④一定距離において二地点以上で存在が確認できること、と述べられている。

今回調査区の場合、必要条件のうち、①は帶状ではなく扇型になる遺構もあり当てはまらない。②は遺物がない遺構もあるため時期の断定は難しいが、本遺跡の場合、路面と仮定した場合の空間上に別の遺構が存在するため、当てはまらない。また十分条件のうち①～③は確認できず、④の条件は、調査面積が狭いため二地点以上で存在の確認はできない。このため道遺構の可能性は低いと言える。

### 4 まとめ

今回検出した遺構は、他の調査例と比較検討すると、円形ないし楕円形のくぼみが一定間隔で並ぶという特徴から、形状としては波板状凹凸面と認定できる。ところが、遺構が帶状に連続せず途中で途切れてしまうこと、路面と仮定する部分に遺構が存在することを考慮すると、ただちに道遺構とは判断できない。今回調査区の周辺遺跡では、宮町遺跡、小西北遺跡、水橋金広・中馬場遺跡、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡、水



図12 満の方向および道路遺構が検出された遺跡分布図 (S=1/50,000・明治43年迅速図に加筆・修正)

## I 宮条南遺跡

橋：杉遺跡で道遺構が確認されている。本遺跡の波板状凹凸面を伴う溝の方向を地形図に落してみると(図12)、どこかの道路遺構につながるとは確認できない。

現時点での宮条南遺跡の波板状凹凸面の性格は、(1)なんらかの目的で地盤を改良する必要があり、土木工事や作業を行った痕跡、(2)斜面を上り下りするための局所的な足掛け、の2つの可能性が考えられる。今後、近隣の調査や類例の増加を待って、詳細な分析を試みたい。

### <引用・参考文献>

近江俊秀1995「道路状遺構の構造」『古代文化』第47巻第4号3-16p 財團法人 古代學協會

近江俊秀2006「古代国家と道路－考古学からの検証」青木書店

近江俊秀2008「道路誕生－考古学からみた道づくり」青木書店

鹿島昌也2004「遺跡から見た天文期の神保氏再興過程～氷野城跡と富山市北東部の中世城跡から～」『富山市日本海文化研究所報』33号 富山市日本海文化研究所

財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所2008「平成19年度 埋蔵文化財年報」

武部健一2003「ものと人間の文化史II 「道」」法政大学出版局

富山考古学会2000「特集 道」「大廈」第20・21号 创立50周年記念合併号41-117p

富山市教育委員会1984「氷野新堀遺跡 発掘調査概要」

富山市教育委員会1987「富山市氷野新堀遺跡 発掘調査概要」

富山市教育委員会1994「富山市浜黒崎懸垂地遺跡 発掘調査概要」

富山市教育委員会1995「富山市浜黒崎懸垂地遺跡 町中新長幅遺跡 野田・半板遺跡」

富山市教育委員会1995「富山市氷野新堀遺跡 発掘調査概要」

富山市教育委員会1996「富山市 野田・半板遺跡 町中新長幅遺跡 宮条南遺跡 高島島浦遺跡」

富山市教育委員会1997「富山市 宮条南遺跡 高島島浦遺跡 針原中町1遺跡 針原中町2遺跡」

富山市教育委員会1997「富山市 水橋金広遺跡 水橋川伏南遺跡 清水堂F遺跡 清水堂B遺跡」

富山市教育委員会1997「富山市内道路発掘調査概要I 古岡遺跡 任壽宮川遺跡 水橋二杉遺跡」

富山市教育委員会1998「富山市 高島島浦遺跡 針原中町1遺跡 針原中町2遺跡」

富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会1998「富山市水橋荒町遺跡発掘調査報告」

富山市教育委員会1999「富山市 清水堂南遺跡 清水堂B遺跡」

富山市教育委員会2000「富山市 清水堂南遺跡」

富山市教育委員会2000「富山市 小四北道路発掘調査概要」

富山市教育委員会2001「富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書」富山市埋蔵文化財調査報告113

富山市教育委員会2002「富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書」富山市埋蔵文化財調査報告115

富山市教育委員会2003「富山市内遺跡発掘調査概要V・水橋二杉遺跡・頬海寺城跡・北代遺跡」富山市埋蔵文化財調査報告129

富山市教育委員会2003「富山市小西郷遺跡発掘調査報告書」富山市埋蔵文化財調査報告129

富山市教育委員会2006「富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書II」富山市埋蔵文化財調査報告6-(1)

富山市教育委員会2007「富山市小川城跡発掘調査報告書」富山市埋蔵文化財調査報告14

富山市教育委員会2012「富山市内遺跡発掘調査概要VI-西金屋・西金屋跡・米田大覚遺跡」富山市埋蔵文化財調査報告49

富山市教育委員会2012「富山市内遺跡発掘調査概要VII」富山市埋蔵文化財調査報告51

野垣好史2005「幾丈人の地底への進出 水橋荒町・辻ヶ堂遺跡『富山市の遺跡物語』5p 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター所報 No6

原井昭二2000「大地の記憶 ～富山の自然史～」桂葉社

吉川知明1984「V まとめ」『氷野新堀遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会

文化庁文化財部記念物課2010「発掘調査のてきさ」

宮田進一・酒井重洋・高梨清志・吉川知明2008「越中」第21回 北陸中世考古学研究会資料集「北陸中世のみち」 北陸中世考古学研究会

## にしかな や にしかな や かまあと II 西金屋・西金屋窯跡

### 第1章 調査の経過

#### 第1節 調査にいたる経緯

西金屋・西金屋窯跡は、昭和63年度～平成3年度に富山市教育委員会（以下：富山市教委）が実施した分布調査で新たに確認された遺跡である。平成5年に「西金屋遺跡」として富山市遺跡地図に登載し、遺跡No.201293として取り扱うこととなった。同年、遺跡の南で実施した道路改良工事に伴う発掘調査で、奈良時代（8世紀後半～9世紀初頭）に操業された須恵器窯を確認し、「西金屋窯跡」とした。平成8年、2遺跡を統合して遺跡名称を「西金屋・西金屋窯跡」と改称し設定した。現在の埋蔵文化財包蔵地面積は26,000m<sup>2</sup>である。

平成24年9月24日、富山市古沢地内において、個人住宅建設について埋蔵文化財包蔵地の所在確認依頼があった。建設予定地全域525.98m<sup>2</sup>が埋蔵文化財包蔵地（西金屋・西金屋窯跡）に含まれていたため、同年10月15日に富山市教委で試掘調査を実施したところ、古代の遺物包含層と溝・ピットなどを検出し、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。建設予定地全域に埋蔵文化財の所在を確認したため、試掘調査の結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。協議の結果、住宅建築部分の地盤改良と切上工事の計画が遺構検出面よりも深く、埋蔵文化財を現地で保存することができないため、住宅建築部分と切上部分136.18m<sup>2</sup>について発掘調査を行い、記録保存することになった。

文化財保護法93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、工事主体者から平成24年10月2日付けで富山市教委へ提出され、富山市教委の副中を付けて平成24年10月4日付け埋文第229号で富山県教育委員会へ提出した。

文化財保護法99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告は、富山市教委から平成24年11月26日付け埋文第229号により富山県教育委員会へ提出した。

#### 第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業は土木会社に掘削業務を委託し、埋蔵文化財センター職員が現地に常駐して調査の監理にあたった。調査着手前にハウスメーカーと調査が必要な範囲について確認を行い、調査区を設定した。

発掘作業は平成24年11月21日から同年12月14日まで行なった。表土掘削は平成24年11月21日にバックホウを用いて行った。排土置場に限りがあるため、掘削した表土は搬出した。

試掘調査結果では遺物包含層が確認されていないため、表土除去完了後、11月22日から人力による遺構検出作業を行い、その後遺構掘削作業を開始した。遺構検出の際、遺物は任意に5mグリッドを設定してグリッド毎に取り上げた。遺構掘削作業と並行して随時写真撮影・測量・図面作成作業を行った。この間、例年よりも早い積雪により、調査はたびたび中断した。

12月13日には遺構掘削を終え、ラジコンヘリコプターによる空中写真と全景写真を撮影した。12月14日に撤収作業を行い、現地調査を完了した。

遺物整理・報告書作成作業は、現地調査終了後埋蔵文化財センターで実施した。

遺物接合作業は、遺構ごとはもちろん、5mグリッド内の遺物や、遺構と対応するグリッドとの間でも行った。

遺構出土遺物でも口縁部・底部が残るものを優先して図化した。遺物写真はデジタルカメラを使用し、図化したものを撮影した。

これらの作業と並行して原稿作成を行い、平成25年3月29日に本告を刊行し、完了した。

II 西金屋・西金屋窯跡

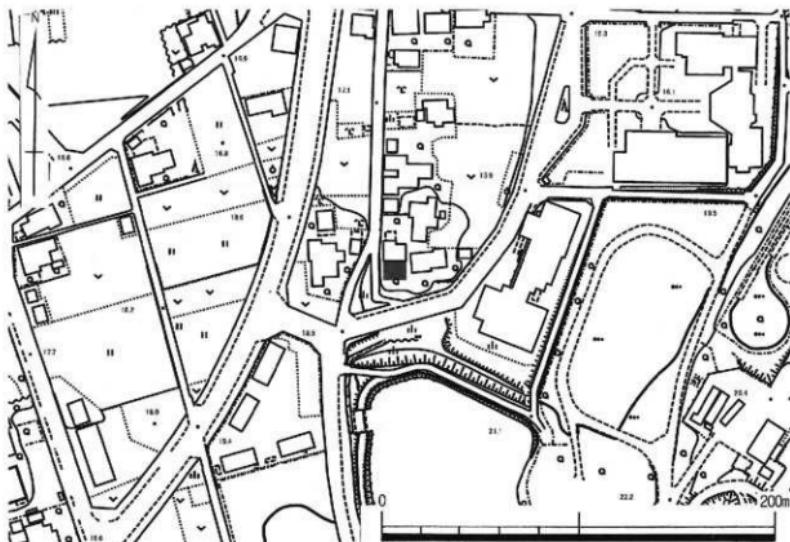


図13 調査区位置図 ( $S=1/2,500$ )

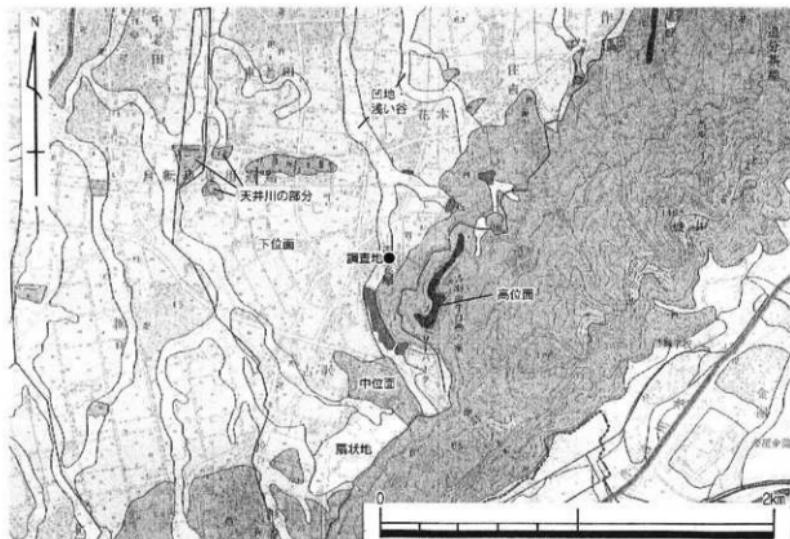


図14 遺跡周辺の地質 ( $S=1/25,000$ ) 国土地理院2007に加筆

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

富山市は富山県のほぼ中央部に位置する。富山市の地勢は、大まかに山間部と平野部に大別され、南が高く、北が低くなるという地勢を示しており、海岸から標高3,000m級の高山地帯までバラエティに富んでいる。

富山平野は富山県中央部の大部分を占めており、北は富山湾と面し、東端は早月川扇状地、西端は県のほぼ中央を二分する呉羽丘陵に、南は飛騨山地から続く丘陵に接する。神通川・常願寺川とその支流が形成した扇状地や低位面・氾濫平野の発達が顕著である。

西金屋・西金屋塚跡（図15・1）は、富山市街地から西方約6kmの富山市西部・富山市古沢・西金屋地区内の東西100m、南北250mに広がる糸文・弥生・奈良・平安・中世にわたる集落・窯跡である。

今回調査区の所在する古沢地区は、富山湾から8km内陸に入った、呉羽丘陵西麓の中位面・下位面・浅い谷・凹地上に立地する（図13）。呉羽丘陵は、東側麓に「呉羽山断層」が存在し、東側斜面は急傾斜、西側斜面は緩傾斜地形となる。地区周辺一帯の地形は、東は最高所を城山（標高145.3m）とする呉羽丘陵の山地や高位面があり、北西に向かって傾斜し下位面を形成する。現在は一見平坦に見えるが、下位面には呉羽丘陵を源流とする小さな開析谷が無数に入り込み、放生津渓に向かって流れ込んで多くの馬蹄状丘陵地形と谷底平野を発達させている。また、地区の南には「境野新扇状地」と呼ばれる旧扇状地が存在し、幅の狭い谷や水流が認められる。

古沢地区のほぼ中央を、北陸自動車道富山西インターチェンジへ繋がる主要地方道新湊・平岡線が南北に貫き、地区的南西で主要地方道富山・小杉線と交差する。地区的北方2.5kmには、JR北陸本線が東西に走っている。主要地方道新湊・平岡線と呉羽丘陵の間には道に沿って家々が建ち並んでいる。米軍が1946年に撮影した航空写真（図版8）を見ると、当時は丘陵地帯に畠地がひろがり、平地には水田が広がるのどかな耕作地であった。また江戸時代には谷地形を利用して多くの溜池用溜池が作られ、現在でも大小10あまりの溜池が残っている。現在、地区内には動物たちとの触れ合いの場として富山市ファミリーパークがある。また富山市ガラス造形研究所や富山市ガラス工房があり、芸術創造の場として利用されている。地区的南で隣接する杉谷地区には富山大学医学部付属病院があり、核病院として地域医療を担っている。近年は、高速道路やインターチェンジ、幹線道路などがあり利便性が高いため、幹線道路沿いには店舗が建てられ、富山西インターチェンジの周辺には企業団地が開発されるなど、かつてののどかな耕作地から、土地利用はかなり変化している。

今回の調査地は古沢地区北東端の尾根上、遺跡の南端に位置する。調査前の現況は宅地で、庭地として利用されていた。調査区付近の標高は約18mで、南に向かって緩やかに傾斜する。

### 第2節 歴史的環境

西金屋・西金屋塚跡を中心として、呉羽丘陵一帯の遺跡について概観する。

本遺跡では平成5年度に今回調査区の南で市道改良工事に伴う発掘調査を行い、奈良時代（8世紀第2～第3四半期）に操業された須恵器窯、粘土探査坑群を検出し、須恵器・土師器・土鍬・土製品・木製品、縄文土器・石器が出土した。中でも四脚を持つ円面鏡が2個体は、大型であり官衙的性格の施設へ供給される製品の可能性があるとされる〔富山市教委・富山市埋蔵文化財調査委員会2000〕。平成23年度は今回調査区の北東80mの地点で個人住宅建築に先立ち発掘調査を行い、奈良時代（8世紀中～末頃）の土師器焼成遺構3基、掘立柱建物2棟、竪穴建物1軒を検出し、縄文土器・土師器・須恵器・土鍬が出土した。奈良時代の土師器焼成遺構は婦負郡域内では初検出である〔富山市教委2012〕。

本遺跡が立地する呉羽丘陵西麓一帯は旧石器時代から中世まで遺跡の分布が濃密である。

境野新遺跡（2）では、東山系石刀技法と瀬戸内系横長剥離技法の技法で作られたナイフ型石器が出

## II 四金屋・西金屋遺跡

上した。向野池遺跡(3)では、尖頭器や黒縞石の細石刃核が出土している〔富山市教委2000〕。このほか杉谷H遺跡、古沢遺跡(4)、古沢A遺跡(5)などで石器が出土している。

引き続き縄文時代にも各時期にわたって遺跡が見られる。古沢遺跡では、縄文時代前期の貯蔵穴を検出している〔富山市教委1977〕。古沢A遺跡では「大柱穴」を検出した〔富山市教委1983〕。本遺跡の南西3.5kmにある平岡遺跡(6)では前期の集落が検出された。北押川B遺跡(7)でも中器の遺構・遺物がある。古沢A遺跡、野下・新開遺跡(8)や杉谷64番遺跡(9)では、晩期の遺構・遺物がある。

弥生時代に入ると、初期農耕に不適なためか、前期～中期は遺跡の分布は低调である。後期初頭に入る」と、向野池遺跡では竪穴建物を検出し、東北地方に多く分布する天王山系の土器が出土した〔富山市教委2006〕。後期後半には、白鳥城(10)で高地性集落を検出した〔富山市教委1983〕。弥生時代終末期になると、遺跡数が増加する。平野には砂川カタダ遺跡(11)などの集落がある〔富山市教委2011〕。丘陵上には杉谷A遺跡(12)で方形周溝基群などを検出した〔富山文化研究会1975〕。続く古墳時代前期には四隅突出墳の杉谷4号墳を含む杉谷古墳群(13)が築かれる〔富山市教委1974〕。古墳時代中期には、境野新遺跡・東老田1遺跡(14)などに集落が営まれ、古沢塚山古墳が築かれる。古墳時代後期には、平野に面した岸面に金屋塚／穴横穴墓(15)が作られた〔富山市教委1976〕。

続く古代になると遺跡周辺から射水丘陵東部にかけては、飛鳥・奈良・平安時代の越中における手工業生産（製陶・製鉄・製炭）の中心地帯となり、遺跡の周囲には生産遺跡が集中する。本遺跡の北東700mには飛鳥時代に操業された金草第一古窯跡(16)がある〔富山市教委1970〕。奈良時代には本遺跡や南方に隣接する古沢3号窯跡(17)・古沢窯跡群(18)が広がり、大量の須恵器が出土した。

本遺跡南西1.5kmには柳谷南遺跡(19・市史跡)がある。8世紀に操業した瓦陶・報業窯で、須恵器・土師器・製鉄関連の遺物のほか200点以上の軒丸瓦が出土し、古代越中における窯業生産の歴史や仏教文化の浸透の様相を解明する上で重要な遺跡である〔富山市教育委員会2002〕。仏教関連の遺物では、向野池遺跡で瓦塔が出土した〔富山市教委2002〕。花ノ木C遺跡(20)では、奈良時代の溝から人形・畜串が出土し、律令祭祀が行われていた〔堀沢2004〕。

中・近世の遺跡としては吳羽丘陵頂部に白鳥城が築かれ、豊臣秀吉が佐々成政攻略の際、前田氏の武将が拠点にしたとされる〔富山市教委1981〕。その出城として、井田川左岸に大崎城や安田城(21・国史跡)が築かれた。本遺跡の南東1.5kmには鎌倉～室町時代の金屋塚遺跡(22)がある。溝で区画された計画的構造の集落で、掘立柱建物、井戸跡、畠跡、道路跡や製鉄関連構造を検出した。白鳥城や大崎城、安田城の中間に位置し、鉄製品の供給集落と推定されている〔富山市教委2007〕。

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	西金屋・西金屋集落	集落・窯	縄文・奈良・平安	12	杉谷A遺跡	集落・墓	弥生(終)～古墳(初)・奈良・平安
2	境野新遺跡	集落	旧石器・縄文	13	杉谷古窯群	古墳	縄文・弥生(終)・古墳(始)
3	向野池遺跡	集落・生產	旧石器・縄文(早・中)・奈良・平安・中世・近世	14	東老田1遺跡	集落・生產	縄文(前)・後・古墳・奈良・平安・中世・近世
4	古沢遺跡	集落・生產	旧石器・縄文(前～後)・奈良・平安	15	金草第一穴横穴墓	古墳	古墳(後)
5	古沢A遺跡	集落・窯	石器・縄文(後～後)・奈良・平安	16	金草第一古窯跡	窯	白鳥
6	平岡遺跡	集落	縄文	17	古沢3号窯跡	窯	奈良
7	北押川B遺跡	集落・生產	縄文(中)・奈良・平安・中世・近世	18	古沢新跡	窯・集落・生產	縄文(初)・奈良
8	野下・新開遺跡	集落	旧石器・縄文(中・後)・奈良・平安	19	杉谷南遺跡	集落・生產	縄文・白鳥・奈良・近世
9	杉谷64番遺跡	集落	縄文(早・前・後)	20	花ノ木C遺跡	集落	縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世
10	白鳥城跡	集落・城館	勞生・古墳・平安・中世	21	安田城跡	城壁	古代・鎌倉・室町・戦国・近世
11	砂川カタダ遺跡	集落	縄文・勞生(後～終)・奈良・平安・中世	22	金屋塚遺跡	古墳・墓・牛糞	奈良・平安・中世・近世

表5 遺跡一覧表



図15 周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)

II 西金屋・西金屋窯跡



図版8 西金屋・西金屋窯跡周辺の航空写真（1946年 米軍撮影）▲の交点が今回調査地

### 第3章 調査の方法と成果

#### 第1節 調査の方法

発掘調査は、最初に耕作土を試掘調査の結果をふまえながら遺構検出面直上までバックホウにより掘削・除去した。その後、遺構検出面から人力による掘削を行った。調査区南半分は後世の擾乱土が厚く堆積しており、遺構確認のため、全て掘削して除去した。

包含層がほとんど残存していないかったため、ただちに遺構検出、遺構掘削を行った。遺構は断面観察用の畦を残して掘削した後、ピットや小さな土坑は半蔵した後、断面を写真と図面に記録し、遺物が出土した遺構は、遺物出土状況写真と図面に記録した後、完掘した。遺物はトータルステーションを使用して位置と高さを記録した。

図面は、平面図・断面図・遺物出土状況図とも縮尺20分の1を基本とし、トータルステーションを使用して作成した。

カメラは現地調査ではデジタルカメラ・プローニー（6×7）サイズを使用し、フィルムはカラーリバーサルと白黒を使用した。遺物写真は、デジタルカメラを使用した。

#### 第2節 層序（図16）

調査区の基本層序は、調査区横面を用いて観察を行った。調査区の土層は、調査区南半分で見られる植樹や造成工事等による擾乱を除き、大まかに以下の2つの層に分けることができる。今回の調査では、II層の上面で遺構検出を行なった。同一検出面のため、遺物が出土しない遺構は時代を特定できなかった。

I層：暗褐色粘土質（耕作土・表土）層厚15~30cm

II層：にぶい黄橙色粘土～砂質土（地山）

#### 第3節 遺構（図16～19、表6、図版9～11）

検出した遺構は、古代の土坑2基、時期不明の溝・上坑・ピットなどがある。主な遺構の概要は以下のとおりである。

##### 1 古代の遺構

SK02 調査区東端で検出した。調査区東側外へ広がるため、全容は不明であるが、検出長2.3m、検出幅1.8m、深さ0.25mである。平面形は隅丸方形、断面は不整形である。炉など検出されなかつたので土坑としたが、堅穴建物の可能性がある。遺構埋土は2層である。上層は黒色粘土質土に炭化物等を含み、遺物が出土する。遺物の出土する高さは一定ではない。下層は黒褐色砂質土に地山の土が縦状に混じり、締り良い。遺構が構築されて間もなく北側が一度埋まり、遺構廃絶の際一気に堆積したと考えられる。

出土遺物は弥生土器・上部器短柄釜がある。遺物の出土状況から弥生土器は流れ込みであり、遺構の時期は奈良・平安時代と考えられる。

SK16 調査区北端で検出した。調査区北側外へ広がるため、全容は不明であるが、検出長1.05m、幅1.05m、深さ0.2mで、平面形は不整形、断面は台形である。遺構埋土は単層である。遺構廃絶後一気に埋まつたと考えられる。樹木等の根に搅乱されており、遺構の残存状況は非常に悪い。焼土や被熱部分等は見られなかった。

出土遺物は、須恵器环Bがある。出土遺物の時期からみて奈良～平安時代に帰属すると考えられる。

##### 2 その他の遺構

SK01 調査区北東端で検出した。調査区外に広がるため、全容は不明であるが、検出長約1.0m、検出幅約0.6m、深さ0.35m。断面は不整形である。遺構埋土は2層で、遺構廃絶後一定の時間をおき堆積したと考えられる。柱痕跡や被熱部分、焼土は見られなかった。出土遺物は縄文土器、須恵器がある。

## II 西金原・西金原遺跡

SK07 柄円形を呈する。長軸1.25m、短軸1.05m、深さ0.4m。断面は台型である。遺構埋土は2層で、遺構が構築されて間もなく一度埋まり、その後一気に堆積したと考えられる。柱痕跡や被熱部分、焼土などは見られなかった。出土遺物は縄文土器・土師器がある。

SK14 不整形を呈する。長軸1.6m、短軸0.9m、深さ0.15m。断面は不整形である。遺構埋土は単層である。遺構の底部にSP26を検出した。柱痕跡や被熱部分、焼土などは見られなかった。出土遺物は時期不明の土器がある。

SK17 不整形を呈する。長軸2.45m、短軸1.75m、深さ0.15m。断面は台型である。遺構埋土は2層である。遺構が構築されて間もなく一度埋まり、その後一気に堆積したと考えられる。柱痕跡や被熱部分、焼土などは見られなかった。出土遺物はなかった。

SK20 円形を呈する。調査区北側外に広がるため、全容は不明であるが、検出長軸1.1m、検出短軸0.6m、深さ0.15m。断面は不整形である。遺構埋土は2層で、SK21と新旧関係がみられ、こちらが新しい。柱痕跡や被熱部分、焼土などは見られなかった。出土遺物はなかった。

SK21 不整形を呈する。調査区北側外に広がるため、全容は不明であるが、検出長軸3.0m、検出短軸1.45m、深さ0.2mの溝状遺構である。断面は不整形である。遺構埋土は2層で、柱痕跡や被熱部分、焼土などは見られなかった。山上遺物は縄文土器・土師器が出土した。

SP03 柄円形を呈する。長軸0.35m、短軸0.25m、深さ0.25mで、断面はU字型である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。柱根・柱痕跡などは見られなかった。出土遺物はなかった。

SP11 柄円形を呈する。長軸0.45m、短軸0.4m、深さ0.15m、断面は舟底型である。遺構埋土は単層で一気に堆積したと考えられる。柱根・柱痕跡などは見られなかった。出土遺物はなかった。

SP12 横円形を呈する。長軸0.55m、短軸0.4m、深さ0.1m、断面は台型である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。柱根・柱痕跡などは見られなかった。出土遺物はなかった。

SP18 不整形を呈する。長軸0.65m、短軸0.5m、深さ0.35m、断面はU字型である。遺構埋土は3層で、当初検出したプランと違い、2つの遺構が重複する可能性がある。上層で掘削した部分は、攪乱の可能性も考えられる。柱根・柱痕跡などは見られなかった。出土遺物はなかった。

SP26 不整形を呈する。長軸0.35m、短軸0.25m、深さ0.2m、断面はU字型である。SK14を掘削中に、遺構底部で検出した。遺構埋土は2層で、一度ある程度の高さまで埋まり、その後一気に堆積したと考えられる。柱根・柱痕跡などは見られなかった。出土遺物はなかった。

遺構番号	平面形態	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	断面形態	出土遺物	備考
SK01	不整形	1.00	0.60	0.35	不整形	縄文土器・須恵器	
SK02	扁丸方形	2.30	1.80	0.25	不整形	弥生土器・土師器	竪穴状土坑
SP03	横円形	0.35	0.25	0.25	U字形		
SK07	横円形	1.25	1.05	0.40	台形	縄文土器・土師器	
SP11	横円形	0.45	0.40	0.15	舟底形		
SP12	横円形	0.55	0.40	0.10	台形		
SK14	不整形	1.60	0.90	0.15	不整形		
SK16	不整形	1.05	1.05	0.20	台形		
SK17	不整形	2.45	1.75	0.15	台形	須恵器	
SK18	不整形	0.65	0.50	0.35	U字形		
SK20	円形	1.10	0.60	0.15	不整形		
S K21	不整形	3.00	1.45	0.20	不整形	縄文土器・土師器	
S P26	不整形	0.35	0.25	0.20	U字形		

表6 遺構一覧表

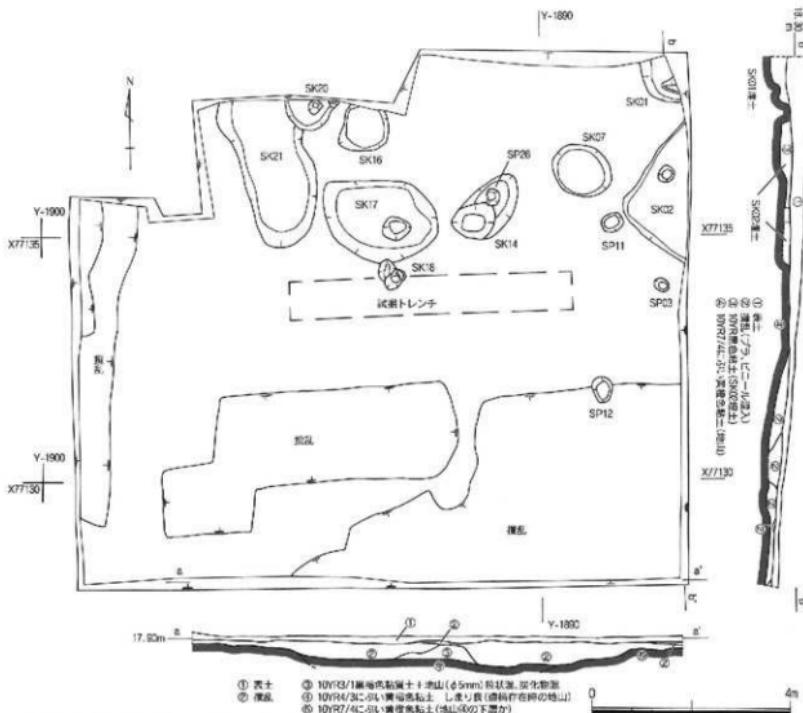


図16 調査区全体図・層序図 (S=1/100)

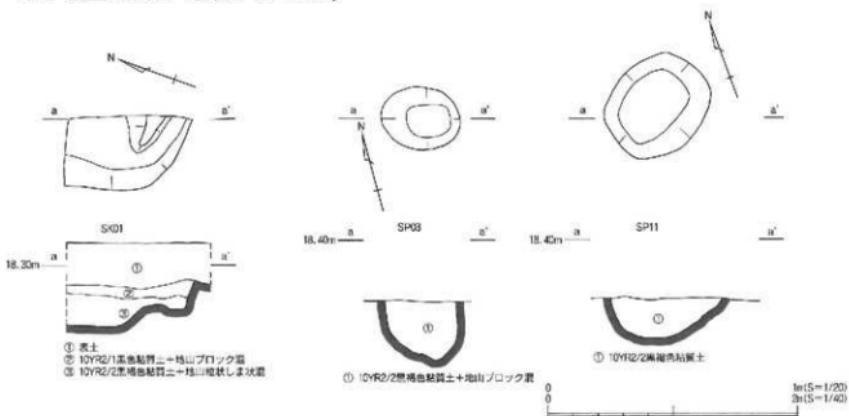
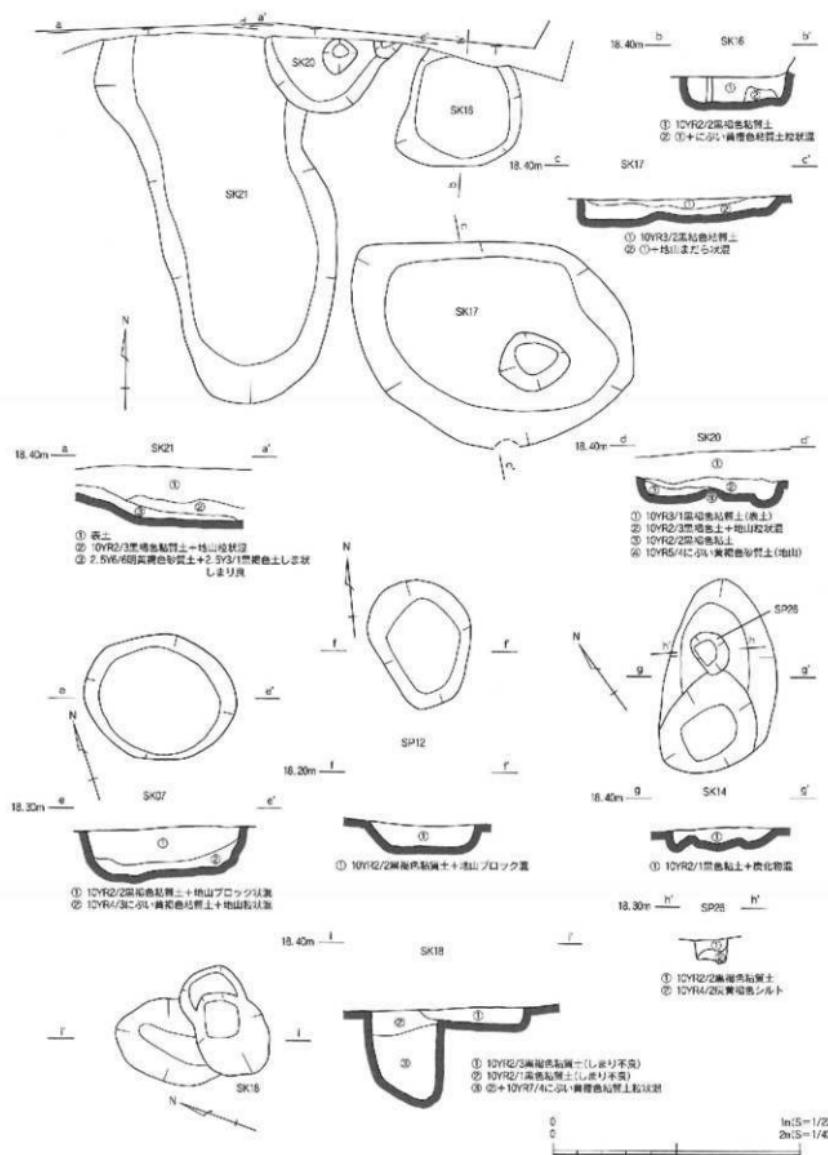


図17 遺構平面図・断面図(1) (S=1/20、SK01はS=1/40)

## II 西金屋・西金屋窯跡



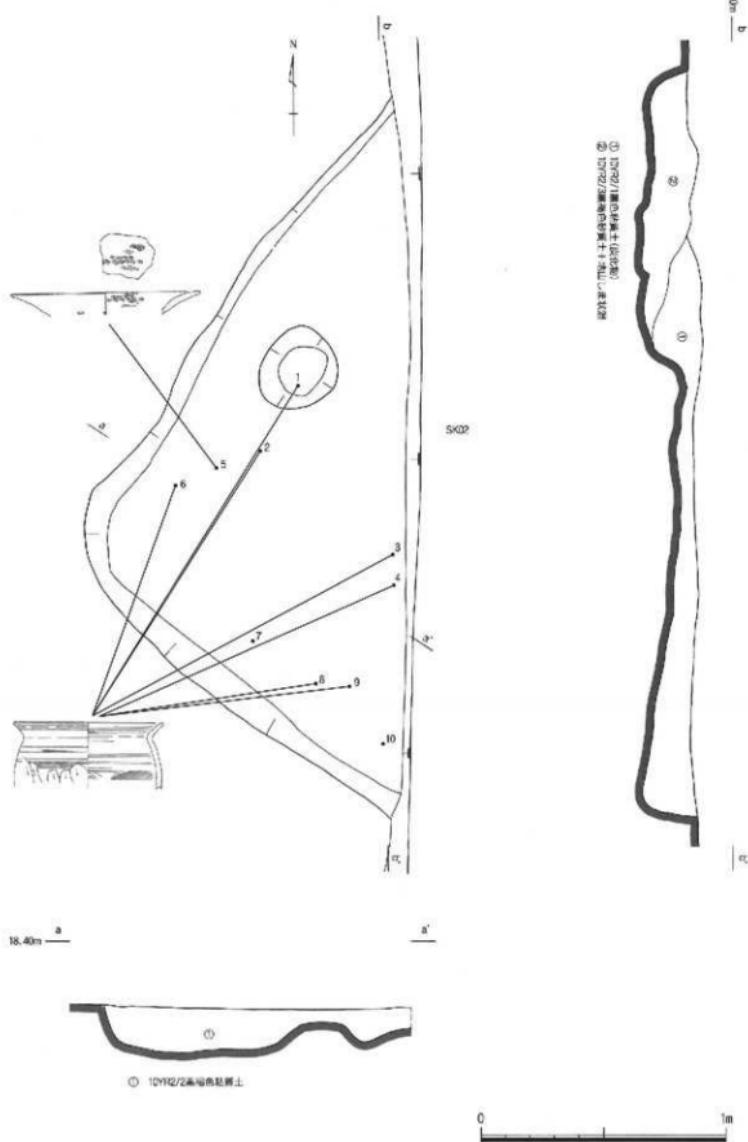
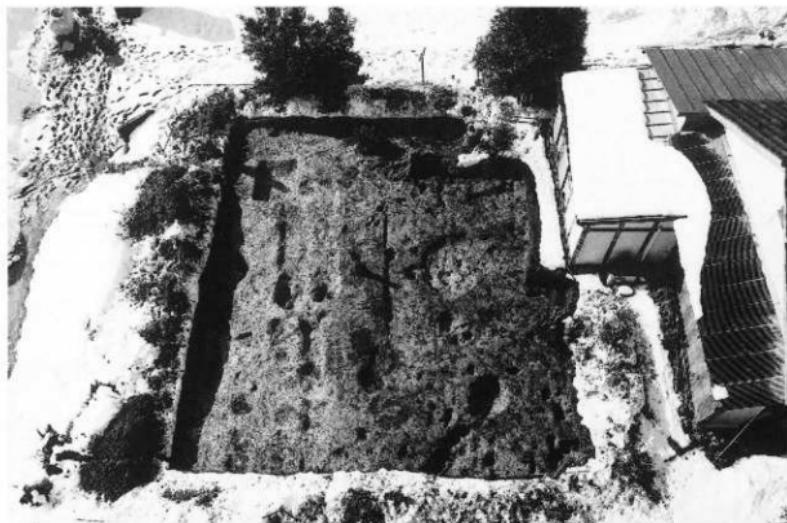


図19 SKO2平面図・断面図 (S=1/20、遺物実測図はS=1/6)

II 西金屋・西金屋窯跡

図版 9 西金屋・西金屋窯跡



調査区全景（東から）



調査区東側完掘（北東から）

II 西金屋・西金屋窯跡



遺構検出状況（北西から）



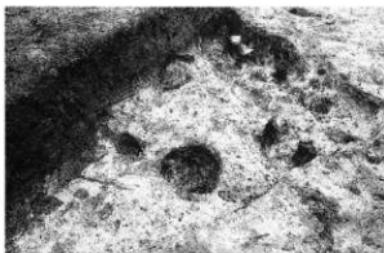
調査区西側完掘（北西から）

II 西金屋・西金屋窯跡

図版  
11  
西金屋・  
西金屋窯跡



SK02 遺物出土状況（南から）



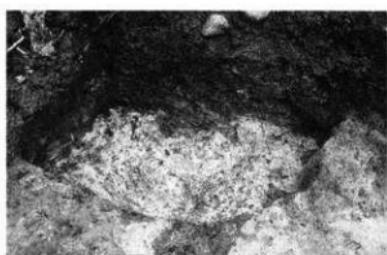
SK02 遺物出土状況（北西から）



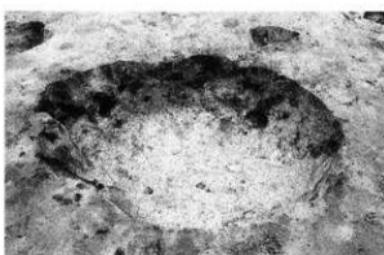
SK02 完掘（南西から）



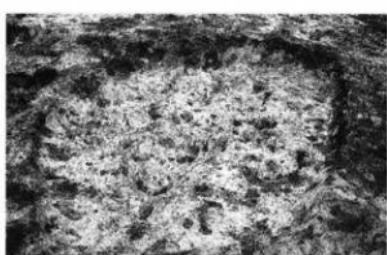
SK02 完掘（西から）



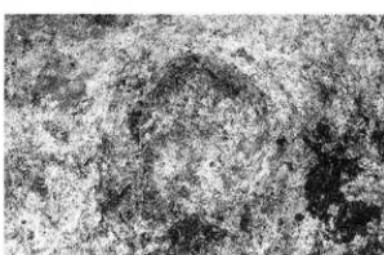
SK01 完掘（西から）



SK07 完掘（南西から）



SK17 完掘（北から）



SP12 完掘（南から）

## 第4節 遺物（図20、表7、図版12）

今回の調査では、試掘調査も含めると縄文土器、弥生土器、須恵器・土師器などがコンテナボックス（60cm×40cm×10cm）に換算して4箱出土した。全体的に縄かい破片が多く、重要な遺構から出土した遺物で実測可能なものを優先し図化した。詳細については次のとおりである。

1 遺構出土遺物（図20-1～3） 1は弥生上器である。甕か壺の口縁部である。長めに外反、外傾する。外面は頸部寄りに棒状工具による刺突文が見られるが、磨滅のため全体の調査は不明である。口縁部内面の施文は、口縁端部寄りにキザミを2条施し、頸部寄りに斜行短線文を2条施す。頸部は横方向のハケである。赤彩は確認できない。煤・炭化物は付着しない。弥生時代中期に帰属する。2は上師器の短胴釜である。卵型の胴部に、頸部で強く屈曲し外反する口縁部をもつ。口縁端部は面取りし、角をもつ。口縁部はナデ、頸部から胴部にかけてカキ口。胴部には外面縱方向のケズリ、内面はハケを施す。煤・炭化物は付着しない。1・2は調査区東端のSK02から出土した。時期が離れているが出土状況から1は流れ込みで、2が遺構に伴うものと考えられる。3は須恵器壺B底部である。器形は底部と体部の境は丸く、貼付高台は外へ踏ん張る。内外ともロクロナデ、底部はヘラ切りと思われるが、磨滅が激しく目視では確認できない。ロクロ回転方向は不明である。胎土は精良、焼成は不良である。窯灰原の不良品が流れ込んだものか。SK16から出土した。

2 包含層その他出土遺物（図20-4～11） 4は縄文土器である。深鉢の胴部から底部である。外面はLR縄文を施し、内面は調整不明である。底部から5cmまで炭化物が付着する。昨年度調査区と同じ縄文時代中期に帰属する。5～11は須恵器である。5は杯蓋である。ボタン状のツマミを貼り付ける。内外面ともロクロナデ、胎土は精良、焼成は良好である。6は环Aである。底部と体部の境は丸く、屈曲は緩い。内外面ともロクロナデ、底部外面は回転ヘラ切りである。胎土は精良、焼成は不良である。表土掘削の際出土。7～8は壺の胴部である。外面にタタキを施す。胎土は精良、焼成は良好である。9は环Aである。底部と体部の境は角張り、体部は外傾する。口縁端部はやや外反しながら丸く収める。底部が厚い。胎土は精良、焼成はやや良である。10は環口縁部である。体部は緩やかに外反しながら外傾する。口縁端部はわずかに外反しながら丸く収める。全体にロクロナデを施す。胎土は精良、焼成は良好である。11は甕か壺の口縁部である。外反し端部を丸く収める。ロクロナデを施す。胎土は精良、焼成は良好である。

9・10は試掘トレンチから出土した。11は表採品である。これら以外は遺構検出の際の出土である。

番号	出土地点	形			寸		施文	色	調		成形・調整	備考
		表面	口径(cm)	溝幅(cm)	底深(cm)	質			内面	外側		
1	SK02 弥生上器裏・腰帯	23.0	(2.8)	-	やや密	良	10YR7/6に薄 黒-10YR17/1淡	10YR7/6 明黄褐	キザミ・斜行短 線文・ハク範文	神社社門にこる 良質火候の不 均一		
2	SK02 土師器・短胴釜	18.1	(8.1)	-	密	良	7.5YR8/8青褐	7.5YR7/6 暗	カキドコヨハナ ナナメイク	ナメ・カキドコ ヨハナ・ケズリ?		
3	SK16 須恵器・环B	(1.7)	7.0	精良	不良	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	ナデ	ナデ	貼付済		
4	遺構検出 縄文土器・壺	-	(8.5)	11.4	堅	1～3 mm厚	10YR7/3 に薄い黒色	10YR7/6 明黄褐	調整不明	神社LR簡文	内面炭化物付着	
5	遺構検出 須恵器・杯蓋	-	(1.35)	-	精良	良	2.5Y7/2 灰	7.5Y4/1 灰	ロクロ	ロクロ	ボタン状 ツマミ貼付	
6	遺構検出 須恵器・环A	-	(2.3)	7.0	精良	不良	2.5Y7/3 灰	2.5Y6/4 に薄い黒	ナデクロナデ 回転ヘラ切	ロクロナデ	回転ヘラ切	
7	遺構検出 須恵器・堅	-	(5.1)	-	精良	良	2.5Y7/2 灰白	5Y7/1 灰白	タタキ	タタキ	タタキハゲメ	
8	遺構検出 須恵器・壺	-	(5.3)	-	精良	良	2.5Y1/2 灰	5Y6/2 灰オーブ	タタキ	タタキ	外側自然釉	
9	4T東 須恵器・环A	12.8	3.2	9.8	精良	やや 粗	2.5Y7/2 灰	2.5Y7/2 灰	ロクロナデ	ロクロナデ?	ロクロナデ?	
10	4T西 須恵器・环	15.8	(1.0)	-	精良	良	5Y8/2 灰	5Y8/2 灰	ロクロナデ?	ロクロナデ?	ロクロナデ?	
11	表採 須恵器・ 光かぼり1種	20.8	(1.7)	-	精良	良	7.5Y5/1 灰	2.5Y6/1 青灰 (口縁部)N4/R	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	

表7 出土遺物観察表

II 西金屋・西金屋窯跡

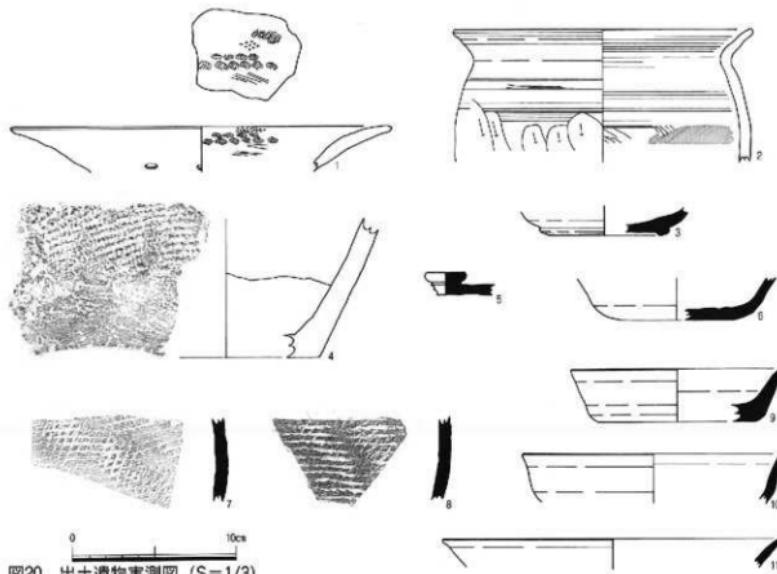
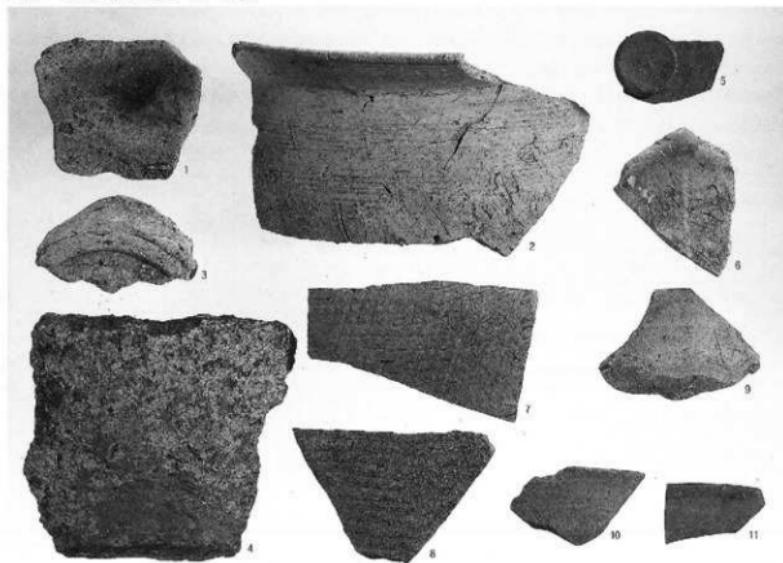


図20 出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )



図版12 西金屋・西金屋窯跡 出土遺物写真 (数字は実測図番号と一致する)

## 第4章 総括

今回の調査では、奈良時代の集落を確認した。

調査区東端で検出した堅穴状土坑SK02は、調査区外に広がるため全容はつかめないが、平面形は隅丸方形を呈する。柱穴・炉跡・焼土・點床などは確認していないが、堅穴建物など人間が居住するための施設であった可能性が高い。遺物は弥生土器、上師器短胴釜が出土した。上師器は8世紀代に帰属し、過去に調査された生産遺跡群と同時期であるといえる。

調査区北寄りには土坑、ピットを検出した。全体の遺構分布や埋土などを考慮すると、おおむねSK02と同じ奈良・平安時代に帰属すると考えられる。

今回調査区の南の低地では、市道改良工事に伴う発掘調査で、奈良時代（8世紀第2～第3四半期）に操業された須恵器窯、粘土採掘坑群を検出した。今回調査区の北東80mで昨年度に行った発掘調査では、斜面の下部で奈良時代（8世紀中～末頃）の土師器焼成遺構3基を検出し、尾根上に掘立柱建物2棟、堅穴建物1軒を検出した。今回の調査区でも、試掘調査の際に南側斜面で粘土採掘坑を検出し、窯体などが探集されている。

今回調査と過去の調査を考慮すると、現在の市道から六泉池に向かって本来は谷地形であり、谷沿いに生産遺跡が点在する。市道西側の現在の集落は尾根地形であり、工人たちの集落や工房が広がっていた、という景観が考えられる。今回調査区は工人集落の南端にある。

このほか、弥生時代中期小松式期の甕か壺が1点、SK02堅穴状土坑から出土した。出土状況から、遺構に伴うものではなく流れ込みと考えられる。この地域一帯では縄文時代晩期までの集落は確認されているが、弥生時代前・中器は遺跡の空白地となる。今回遺物が出土したことにより、近隣に未確認のこの時期の遺跡が所在することが予想される。

縄文土器は、昨年度出土したものと同じ中期に帰属すると考えられる。今回の調査区では確認しなかつたが、周辺に縄文時代の遺構も存在すると考えられる。

今回の調査では、遺構、出土遺物ともわずかであるが、古沢地区に広がる古代生産遺跡群を支えた工人们が生活していた集落を昨年度に統いて確認し、その一部を明らかにすることができた。

### ＜引用・参考文献＞

- 富山市教育委員会1999『砺谷南遺跡』富山市内遺跡発掘調査概要III
- 富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会2000『富山市西金屋空跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会2002『富山市向野土遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告114
- 富山市教育委員会2002『富山市砺谷南遺跡発掘調査報告書II』富山市埋蔵文化財調査報告124
- 富山市教育委員会2002『富山市砺谷南遺跡発掘調査報告書III』富山市埋蔵文化財調査報告125
- 富山市教育委員会2006『富山市内遺跡発掘調査概要I－砂川カタダ遺跡・西ノ候遺跡－』富山市埋蔵文化財調査報告10
- 富山市教育委員会2006『富山市東巻田I遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告12
- 富山市教育委員会2007『富山市金屋南遺跡発掘調査報告書IV』富山市埋蔵文化財調査報告17
- 富山市教育委員会2011『富山市内遺跡発掘調査概要V－砂川カタダ遺跡・今市遺跡－』富山市埋蔵文化財調査報告44
- 富山市教育委員会2012『富山市内遺跡発掘調査概要VI－西金屋・西金屋塗跡・米田大覚遺跡－』富山市埋蔵文化財調査報告49
- 文化庁文化財部記念物課2010『発掘調査のてびき』
- 堀沢祐一2004『古代縄負器の祭祀場か 花ノ木C遺跡』『富山市の遺跡物語』10p 富山市教育委員会・埋蔵文化財センター所報 No.5

## 報告書抄録

ふりがな	とやましないいせきはつくつちょうさかいよう はち						
書名	富山市内遺跡発掘調査概要 VII						
副書名	宮条南遺跡・西金屋・西金屋窯跡						
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	55						
編著者名	細辻京門・加速器分析研究所						
編集機関	富山市教育委員会 埼藏文化財センター						
編集機関住所	〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 TEL. 076-442-4246						
発行年月日	西暦2013年3月29日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
市町村	遺跡番号	...	...	...	...	...	...
宮条南遺跡	富山市町袋地内	16201	201043	36度44分5秒	137度16分46秒	平成24年10月9日～11月26日	202.4
西金屋・西金屋窯跡	富山市古沢地内	16201	201293	36度41分43秒	137度8分44秒	平成24年11月21日～12月14日	136.18
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺構	特記事項		
宮条南遺跡	集落	古代	波板状凹凸面を伴う溝・溝・土坑	土師器・須恵器	波板状凹凸面を作り溝5条を検出		
		中世	溝・土坑	中世土師器・珠洲・古磁			
西金屋・西金屋窯跡	集落・窯	繩文時代		縄文土器	竪穴建物と考えられる土坑1基を検出		
		弥生時代		弥生土器			
		奈良・平安	土坑	土師器・須恵器			
要約	宮条南遺跡 古代～中世の遺構を確認した。調査区の中央～東端で波板状凹凸面を作り溝を5条検出した。溝は放射状になっており、溝の底部に円形あるいは梢円形のくぼみが一定の間隔で並ぶ。何らかの目的で地盤を改良するために掘られたか、斜面の足掛けの可能性が考えられる。 波板状凹凸面を伴う溝埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、9～11世紀代の年代が得られた。 今回調査区は、当時の集落の南東縁にあたり、集落の中心は北西側に広がると考えられる。						
	西金屋・西金屋窯跡 古代の遺構を確認した。調査区の東端で8世紀代の竪穴状土坑を検出した。調査区外に広がるため、全容は不明だが、検出長2.3m、検出幅1.8m、深さ0.25mの規模で、平面形は隅丸方形と推定される。川上遺物には土師器類・灰陶器がある。炉跡やカマドは検出していないが、竪穴建物の可能性が高い。過去の調査を考慮すると、丘谷沿いの斜面に生産遺跡が点在し、尾根上に工人の生活空間が広がる。今回調査区は工人集落の南端にあたる。						

富山市埋蔵文化財調査報告 55

**富山市内遺跡発掘調査概要VII**

一宮条南遺跡 西金屋・西金屋塗跡一

2013年3月29日発行

発 行 富山市教育委員会

編 集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2番24号

TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷 いおざき印刷株式会社

